

長船社研の教訓と
革命的マルクス主義者の道

1966年3月

赤 崎 次 郎

目次

(一) はじめに 2

(二) 組合の経過 3

(三) 対立は何か——社研との論争点 5

四 今次闘争の総括

(1) 敗北の直接原因——企業連の問題点 7

 A 緒戦の敗北と右派コース

 B 統一戦線戦術の欠如した「中間総括」

 C 議会主義的選挙に埋没

 D 「闘う社研」に最後の期待

 E 刷同にたいする甘い評価

 F 無準備のまま刷同案を否決

 G 大動搖の「左派」——刷同に「錦の御旗」を与える

 H 組合主義に終始した社研——核心的問題は何か

(2) 原則主義と大衆追隨主義の反合闘争 13

(3) 「こえ」と「前進」派の密月旅行——不可解な長船社研 15

五 社研の歴史的総括のために

(1) 社研の発展経過 17

(2) 無内容な「原則主義」 18

 A 反戦闘争より勤評は「高い」闘いか

 B 反戦闘争を否定

 C ソ連核実験反対が何故「ソ連論」論争になるのか

 D ソ連論における裏返し

 E 改良闘争と革命闘争の区別と連関

 F 不況＝合理化か？

 G 賃闘にみられるサンジカリズム

 H 立場・要求・組織戦術について

(3) 党組織づくりにおける組合主義 23

 A 理論活動の軽視

 B 客観主義と「長船共産主義」

 C 党と活動家組織の二重写し

 D 根底にある組合主義

 E 危機を深めた「前進」派との癒着

六 自己切開と新しい出発を 27

(附) 革命的マルクス主義者として 28

 出発するにあたって

長船社研の教訓と

革命的マルクス主義者の道

一九六六年三月 赤崎次郎

(一) はじめに

どんな劇的ドラマも日々起きている生々しい現実の階級闘争の變化には及びもつかない。ここ二ヶ月余にわたる三菱長崎造船所における、労働組合の分裂と「左翼」の敗北の過程は、我々革命的マルクス主義者の道を歩もうとし、反帝国主義・反スターリン主義運動を押し進めようとしている者にとって、これ程苦痛に満ちた日々はなかつた。エリコン闘争を始め臨時工闘争、賃金闘争等数々の闘いをおこない、日本労働運動の中でも最も戦闘的労働組合だとされた全造船三菱支部（二万二千名）と、その中核であった長崎造船分会（一万二千名）における分裂は、予想を超えて驚ろく程の早さで進んでいった。この攻撃はいりまでもなく、三重工合併に伴う資本の合理化攻勢と分裂主義者の策動によるものである。しかし今日この問題をとらえる時、単に敵の攻撃であり、それに勝てなかつたと見ることは、そこから何もかも掴み出すことは出来ない。またここから導き出される教訓や対策を、今日各所で合併に伴う

企業連の結成が行なわれていることから、「左翼」の諸君が「第二組合」対策というような組合次元での総括をやっても、それでは余りにも皮相的の見方である。そのようなことでは、総評などでやっている第二組合対策と、本質的に何ら変わらないものであり、我々に必要なことはそのようなことではない。

三井三池の労働組合は日本最強の労働組合だと評価されていた。事実今日までの闘いで、あれ程ねばり強く闘い抜いた組合はなかつた。少数になつたとはいえ、激しい差別待遇と資本の攻撃の中で現在なおも闘いつつある。それにもかかわらず三池闘争でホッパード守の闘いが行なわれている際、「白紙委任の幹旋案」が出された時三池労働者は炭労働部を信じてそれを認めてしまった。当時の全学連と旧共産主義者同盟（略称ブンド）のオルグは現地において、その欺瞞性をバクロシ「断じて受け入れるべきでない」ことを訴えた。ところが職場の活動家から我々は完全に浮き上つた。彼らは心から炭労働部を信頼していたのである。我々にしてみれば数々の裏切りを行ってきた炭労働部のゴマカシは火を見るより明らかであったし池田内閣の企図は明白であった。そしてそのことはその後の首切り

を認めた「中労委幹旋案」が出ることによって明らかになつた。

外堀を埋められた三池の労働者は歯ざしりをしてくやしがつたが既に戦力は落ち大敗北を喫せざるを得なかつた。我々はこの中に日本最強の労働組合と活動家を育てた社会主義協会の限界性をまざまざとみせつけられた。

我々革命的マルクス主義者は、このような限界性を乗り越えて、より一層強固な労働組合と、活動家を作り出すべく努力を開始した。それは極めて困難な闘いであつた。その中で長船労働者の戦闘性とその中核である長船社研の進出に多くの期待が寄せられた。新らしい革命的左翼の最先頭をゆくものとして長船社研は注目を浴び重要な位置を担つた。まさにその時、長船労働者はもろくも第二組合の前に崩れ去つたのである。我々が限界性を突き出した社会主義協会の三池には及びもつかなかつたわけである。勿論三池の場合は社会主義協会の一党支配であり、職場の活動家までその思想が浸みわたつていた状態と、四派（社・共・民社・社研）の中で相対多数に過ぎず歴史も浅い社研とを同列に比較することは出来ない。しかし問題はむしろ職場の活動家の多数の中に思想が浸透する前に、最初の大きな敗北をこうむってしまったことにこそ大きな問題点があるのではなからうか。

このことと関連して最も重要なことは、今次長船労働者と社研の後退は、革命的マルクス主義運動を進めてゆく上での或る意味で大きな犠牲である。この犠牲を如何に教訓として乗り越えて進んでゆか、先にも指摘したように単なる第二組合対策という組合次元のものに解消してはならない。つまり我々が革命を進めてゆく上で如何なる党を作り、如何にして民社・社・共をのりこえて革命的に労働組合運動を推進してゆくか、という面よりこの問題をとらえなければならぬ。即ち反帝国主義・反スターリン主義世界革命戦略と

その組織戦術という立場から、この問題を掘り下げてゆかなければならない。それゆえ今回の問題を単に社研の問題としてのみとらえてはならない。己れ自身の問題としてとらえ返し、己れ自身にメスを入れ、共通の苦悩を味わいながら、教訓を引き出すようにしなければならぬであろう。そのことが一歩重大な後退をしながらも、なおかつ再び強力な部隊として登場しよつとして、社研に対する最大の支援である。同時に今日各所で苦闘している、同志達に対する大きな導きであり、この教訓が血となり肉となつてこそ、新しい革命的左翼の一大前進をもたらすものとなるであろう。以下私はそのような角度で本問題を分析してゆきたい。従つて『月刊労働運動』や社会主義協会等々の総括とは無縁である。また既成政党や既成「左翼」からする分裂の責任を社研に転化するような一切の反トロキヤンペインとは、断固として闘うであろう。だがそのことは決して、社研の進めてきた闘いの中の誤まりを、隠蔽するようなものであってはならない。その教訓の中から革命的マルクス主義者は如何なる道を進まなければならないかを、明示するものでなければ無意味であろう。

(二) 組合の経過

「三菱重工業は、このほど合理化のため名古屋、東中国、近畿の三地区に同社の工場の土地建物、厚生施設などを管理する不動産会社を設立してここへ従業員を出向させることに決め、近く労組の了解を求める。同社ではすでに長崎造船所で臨時工を整理したほか、社員を子会社のキャタピラー三菱、三菱自動車販売などに約九百人

転出させているが、不動産設立によりさらに五、六百人程度の人減らしをする計画である。同社ではこのほか、運輸、社内食堂などの部門を別会社にする案を検討しており、昨年秋季組合に示した合計三千人程度の人減らし案をさらに進める意向である。」(三月五日「朝日」)

ここに報じられるまでもなく、長船の職場では既に多数の出向者を出す他、何百名にも昇る指名配転が行なわれている。一昨年六月三菱資本は、不況と激しい内外市場競争にうちかつため、日本帝国主義のチャンピオンとして、海外進出をめぐらし、三重工の合併を決定した。これによって労働者階級に対する一層の搾取と抑圧を強めるため、具体的合理化案を昨年七月中旬構想として発表された。その内容は、一期一〇〇億円の利益実現のため、固定費二九億、変動費三一億、合計六〇億の節減をめざし、これを六六年九月末を完了目途にして①職制の簡素化と役職者の再配置、②直間比の是正、③病院経営改善、④福利厚生部門の合理化、⑤保安関係要員の縮減、⑥職場規律の確立、⑦低稼働設備の整理、⑧隘路設備の整理、⑨不良下請の整理、⑩鑄工場の検討、⑪機種統合・採算不良機種の整理、⑫研究所の整理と統合、⑬材料・仕掛り・在庫の低減、⑭機械計算機構の縮小、他に長崎に対しては⑮福田工場の検討、⑯幸町工場の検討が追加された。この方針にもすぎ九月には本社及各事業所毎の具体案が提示されたのである。この中には全体で二六五〇名(長船四九〇名)に昇る関連産業への出向(休職派遣)も含まれていた。前記した人減らし、配転もこの具体的実行として労働者に攻撃がかかってきているのである。従来の体制ならば長船分會を始めとして激的な反対闘争が繰り広げられていなければならないのであるが、次のような事態の下で刷同(民社)系の御用支配によって労働者の憤激、闘いは個々分散的に押えられている。十二月七日二千名の組

制の崩れをいかんともなしたがたかった。

(三) 対立は何か

社研との論争点

このような状況の中で、長船社研の方針が正しかったと仮定しても、既に分裂が開始されてからは、第二組合を阻止することは出来なかったであろう。しかし精神的ではあったが、その闘いにはかなり大きな問題点をはらんでいることも事実である。長船分會では、早くから各派の党派闘争が激烈であり、それだけに労働者の階級意識は高められているものと思われていた。ところが今次の分裂で、想像以上に急速な崩壊をまねいたことはなぜか、私は当初かなり判断に苦しんだ。しかし長船社研の同志との討論の中で、その原因が解明されてきた。そこに明らかに間違った対処の仕方があったと私は考えるのである。しかし、私の何回かの批判討論によっても社研の諸君とはいぜんとして大きなくちがいが残ってしまった。

始めに分裂問題が具体化した時、今次分裂の特徴は「平和時の分裂」であり、第二は「思想別組合」だ、というように訴えがなされてきた。合理化攻勢の最中であり、企業連結成と合理化は裏腹の関係であるのに、このような把握には自分は当然納得出来なかった。また既に第一組合がかなり崩れてしまい、小手先では解決つかない時点に来た時、なおかつ社党との話しあい、危機の対処にあつた。もはやあの時点では「革命的敗北主義」の立場に立つ以外ないことを私は強調した。にもかかわらず新体制への移行を行なっ

合員によって旗あげした第二組合は年内に過半数を突破、一月二十七日現在長船分會千五百余名、支部全体で二千名を残し、二万名の組合員を組織していった。彼らの分裂策動は六五年九月二十八日十月二日においておこなわれた三菱支部三二回定期大会で、刷同系執行部が提示した合理化方針と四労組の組織統一準備案が否決され次期役員立候補をとりやめてから組織的に開始された。

十一月九日広職支部脱退を期に、十二月七日長船分裂、十二月十三日福工分裂、十二月十五日下船分裂、十二月二十八日広機脱退、一月一三日広労分裂と三菱全支部に波及、またたくまに大量の労働者を彼らの手中に納めていった。

この間日共は終始分裂の動きを察知できないばかりか、逆に分裂策動の情報を社研のデマであり挑発だといって反トロキヤンペーンに終始した。民社党役員の出席している執行委員会では対策が出来ないため、事前対策を遅らせてしまった。分裂直前の粉砕ピラでさえ民社と一様に反対するといふ裏切り行動を行なった。分裂開始後も無内容を「統一と団結」論で何ら明確な方針さえ提示出来なかったのである。

社会党系は完全に動揺、一方ではこれを機に自己のヘゲモニーを確立するため、長船社研にたいするしめつけを強化し、社研活動の圧殺と条件闘争への転換を計り執行部の明け渡しをせまってきた。他方執行部を押さえると民社系とのボス交で組織統一の取り引きを行い、これが拒否されるとまたたくまに第二に流れてゆくものも出るという状況を示した。また、これ程重要な分裂にもかかわらず、全造船は民社系の策動により、何らの支援すら出来ず、三菱支部は全く孤立の中で闘わざるを得なかった。

日共の裏切り、社党の動揺の中で、長船社研は、全力を挙げて刷同の分裂策動と資本の合理化攻勢と闘ったが、先きにみたより本体的に、結果的には分裂を阻止することは出来なかった。さらにこれらの教訓と支援を、何よりも革命的左翼によって行なわなければならないのに、「こえ」などを含めた、反代々木一般に解消していった。今次反合闘争全体の評価についても、残念ながら今日まで大きくない違いをもたらしている。

長船社研は今、文字通り重要な転機に来ている。この転機を単に従来のような活動が出来ないからといって、例えば非公然面の強化(それも勿論大切であるが)というような技術的操作に解消することなく、本質的な転換を計ってもらいたいと考えている。

しかし今日この段にいたってもなおかつ、「企業内組合の分裂とは何か」「長船では前から四つに分裂していたのだ」「本来なら企業合併と共にマルガカエで一本化したらどうか」「それが二年間も維持出来たのは社研の活動があったからだ」「しかも分裂してもなおかつ二千名の労働者が残ったのは我々が残ったからだ」というようなことをいっている。我々はなにもそのような組合次元でのことを問題にしているのではなく、もっと本質的な革命戦略と組織戦術、党建設にかかわることを指摘しているのである。そのようなことをいうと「何と負けおしみをいっているのだらう」としか受け取られないのが現実であろう。社研の諸君はまだ今次闘争の敗北によってもたらされる重要な内容を理解してないようだ。勿論破壊意識などはない。たしかにこの困難な状況の中で敗北主義になってしまつては困るし、「断固としてやるぞ」といふ決意は嬉しく思う。しかし現実の闘いの敗北を敗北として卒直に受け取り、その中から真の教訓を学ぼうという姿勢がなければ、次の正しい発展はありえないのである。

現在第一組合は一応小康状態を保ち、若干の復帰者も出ているという。また第二組合の中でも矛盾が出て極悪分子にたいする不信が

あるようだ。民社系指導者の裏切りにたいする労働者の不満が種々な形態でこれからも出されよう。しかしながらそのような即自的反発や不満があったとしても、それをのりこえる組織的な闘いとして実現され、組織化されない限り、民社系支配を打倒しうるものにはなで発展することはない。現に彼らは役員選挙等における推薦制や色々な形で従来みられないような弾圧体制をひいてきている。ひとたび第二組合に支配された大経営の労働組合が、再び戦闘化することなどはどんなに困難なものであるか、過去の歴史をのべるまでもなかる。刷同の支配体制とあわせて、三菱資本による職場への配転合理化攻撃は、急ピッチに進められ、労働者が二度と資本に刃向かうことのできないよう狙いうちをかけてくるであろう。

民社系の主要なねらいは現在第一組合そのものより、全造船に集中してきている。全造船七万六千名にたいし、既に二万名を切り取った民社は、横造七千を民社系で押え、いつでも脱退出来る状況にしておきながら、石川島一万の労働者に全力投入をしてきている。石川島を彼らが支配すれば、I M F・J C路線への組み入れや造船総連(同盟)との統一を出して行くかも知れない。既に全造船は三菱の分裂に何らの支援も出来なかった。その上今次春闘で石川島と横造は企業連を主として考え、全造船の統一闘争には従わない方向を出してきている。三菱二千弱の労働者にとって本場の危機は全造船がかくして崩れ出した時である。このような可能性がないとはいきれないし、その時こそ二度び残された労働者へのゆさぶりが掛けられてくることは必至である。「社研」を含め一層激しい試練と再編成が訪れるであろう。今次闘争の敗北は、実に今迄比較的自由な組合活動の出来た長船労働者には、想像も出来ない位、資本と刷同の御用支配でがんじがらめにされる最初の契機なのである。その中における長船社研の活動も、全く違った様相を取らなくてはなら

なくなるであろう。

今次闘争の評価をめぐる私と社研との数々の大きな違いは、従来の活動の中にも漠然としてあったし、多くの疑問もあった。それが今回の決定的問題をめぐって表面化したものと考えられる。臨時闘争をめぐるあまりにも機械的な対処の仕方。反戦闘争における、かつての社学同と同じような見解。ソ連論を青年部の中でストリートに問題するやり方。賃金理論などはないという考え方。等々あまりにも原則主義一本のような対処の仕方に問題が現われていた。また浜野参院選へのかわり方。社・共も含めた反刷同統一戦線という固定した考え方。組合への進出とは裏腹に、職場体制の確立とイデオロギー活動の軽視。労働運動の戦闘化と党建設の段階的理解など。これらのものは単に情勢把握が弱かったとか、という技術的戦術的なものに解消することは出来ず、総路線上の問題にまでかわってくる対立であると考ええる。その集中的な表現として、別な形態を取って現われたのが、革共同「前進」中核派と革共同革命的マルクス主義派(略称革マル派)に対する評価の違いである。現在革命的左翼の陣営の中には、この両者による基本的な対決が行なわれている。「前進」中核派の指導した全通羽田闘争の破産から、このような組合主義や大衆運動主義では限界があることが決定的に突き出された。彼らの誤まりはそれだけではないが、私としてはそのことを含めて、「前進」中核派にたいする批判は徹底的に行なってきた。このことは間接的に長船社研がそのような道を歩まないようにする忠告としても自分は考えて来たのであった。しかし残念ながら全通羽田闘争から何ら学ぶことをせず、事態は増々逆の方向へ行ってしまった。今日では「前進」中核派と本質的には何ら変わらない状態にまで、変質してしまっただけである。

このような経過を振り返ってみた場合、長船社研発足当初よりあ

(四) 今次闘争の総括

論争点は、企業連との対決、反合闘争の進め方、第二結成後の闘い方、「こえ」との問題などであり、これは同時に、より根本的には、改良闘争へのかかわり方、反スターリニズムの理解、党の考え方、思考法にまでおよび、これは社研の全歴史にもつながってくる。ここでは、まず、今次闘争の問題について考え、つぎに社研の活動をふりかえりつつ、根本的な諸問題を考えてみたい。

(1) 敗北の直接原因 企業連での問題点

まず今回の分裂問題の直接の前提をなしている右派の企業連をめぐる攻撃との闘いの問題を歴史的な経過をいながら考えてみよう。

(A) 結成の敗北と右派コース

三菱三重工合併(六〇年六月一日)に伴なり、労資の妥協なき闘いの前哨戦は、既にその年の春闘において開始されていた。会社側は東・中・西の各組合労働者の労働条件を「均一」化するため、賃上げ要求にたいし「本給調整金」の回答をしてきた。これはいりまでもなく、いままでも絶えず先進的役割を果たしてきた。全造船三菱支部にたいする攻撃であり、既得権にたいする剝奪を意味した。三菱労連(東)と同盟三菱(中)の御用幹部はこれを受け入れ、最後まで屈しなかった三菱支部は、単独闘争をよぎなくされながらも頑張り抜いた。しかし七十日におよぶストも、内部の動揺を防ぐことが出来ず敗北に終わった。

った。「原則主義」と「組合主義」的思想傾向は変わらないとしても今日のよりな傾向がそのままはじめからあったとは思えない。恐らく長船社研自体も、結成当初(後でのべる第二期)においては今日のように自己合理化と絶対化はしていなかった。それが決定的分岐をもたらしてきたのは、第三期にみられるような、組合への一定の進出からである。この進出によって自己の路線に確信をいだき、より一層「組合主義」を開花させていったものと考ええる。それゆえ長船分会における社研の進出から、党建設についても、言葉として否定しながらも次のような展望を持つに致ったと思う。つまり長船を拠点にしなが、三菱支部→全造船(産業別組織)→全国組織へと進出するコースである。この過程で組合の戦闘化を計りながら、党建設を行い全国的な労働者党を作つてゆこうとしていたのではないのか。そしてこのような長船社研の運動にたいする「成果」を「前進」中核派が、モデルにしながら論理化を計つてゆく、という相互もたれあいの関係になっていった。

かくして第三期に入つて色々な問題で私と意見が違つていくなり今次の闘いにおいて決定的になったと考える。その立場で従来不明確に存在していた数々の問題に光を当て、ここに検討を加えたわけである。

現在長船社研のおかれていいる状態は極めて困難である。このよりな苦しい状況に落ち入る前に、我々自身が、本当に命掛けて同志的批判を加え、これを阻止するよう努力する必要がある。自分としてそのことの不十分さを反省すると共に、この総括が従来からの活動の切開の一助になれば幸いであると思つていいる。本来このよりな総括は、長船社研の諸君と一緒に深めることが、最も好ましい。しかし今日までの状況では、総括の視点が、かなり違つたので、独自に分析し諸兄の批判をおおきたい次第である。

執行部の「左翼」内閣は責任を追求され、八月の臨時大会に総辞職を余儀なくされた。その結果、刷同のヘゲモニーによる右派路線が確立し、続いておこなわれた十一月の長船分会役員選挙でも、刷同が進出する状態をもたらした。三重工合併による緒戦の闘いは、かくして労働者の敗北に終わったのである。このことの意味する内容は、極めて重要なものがあつた。即ち反合闘争の前途は、容易ならぬことを労働者階級の前に乱打し、なかなんする左翼をもって任ずる、長船社研の真価が問われる教訓であつた。

労資協調路線を歩む刷同路線は、企業連結をめざし以後急ピツチに進められた。六五年二月四労組（新たに作られた本社労組を含め）は「三菱重工四労組協議会（略称四労協）」を設置、労働条件を中心とした対会社交渉は、この四労協に力点をあつたことになった。組織統合については、十月一日を目途とし三菱重工新連合を結成することまで確認した。この方針にもとづき、四組合共同提案による「三菱重工組織統一準備会」を設置し、新連合の綱領、規約、運動方針、役員選衡、財政措置等の重要問題を処理することを、それぞれの大会で確認する方向まで進められた。その方針にもとづき同盟三菱は八月末、三菱労連は九月末、本社労組は十月初旬の定期大会でそれぞれ確認された。

事態はこのように彼らのコースにもとづきどんどん進められてゆく一方、これとあわせて会社側の合理化計画も着々と進められていった。合併によるメリットもあがらず、石播に追いあげられてきた三菱資本は、六五年六月一日強力な布陣のもとに合理化専門委員会を発足させた。七月には早くも十四項目に昇る中間構想を発表、九月に入るや本社段階での具体案、次いで長船での具体案とやつぎばやに攻撃をかけてきた。

蓄積（大衆把握）がなかつた弱体であることが露呈した。「独自組織」として刷同に反対するすべての者を含めた『強くする会』の推進等々。ここから社・共・社研の「左派連合」が生れたり、日共に統一行動を申入れたり、日共は刷同と闘わない日和見主義者だという理解になったり、社・共・なかなんずく日共にたいする本質的批判の欠如が固定化されるのである。

他面、現実の活動の中では、次のような裏返しのことも出されている。八月の支部臨時大会による総辞職と、同志会の動揺からくる刷同との癒着から、同志会を徹底的に敵視したのである。社研が極くわずかのうちは、同志会の蔭にかくれて進出した。ところが社研がある程度強力になり、同志会が動揺したら、途端に十把一がらけに敵対視するという問題とささの問題は表裏の關係にある。このような左右両極の傾向は、長船社研の統一戦線戦術にたいする不明確さから来ている。つまり、現実に日共中央が、我々革命的左翼をスパイ挑発者集団と規定し活動している以上、細胞段階といえども、直接に統一行動の対象にあげられるものではない。それゆえ同志会の動揺性やその本質をつかみながらも、同志会内の良心的部分と職場からの統一行動が必要になる。現在の改良主義的労働組合内での活動の場合、特にこのような組織上の戦術の運用にたけることは、極めて重要になってくる。

このようにみてきた場合、「中間総括」は組合主義的総括の域を出ず、我々の革命戦略にむかつての組織戦術という立場が、完全に欠如しているものであつた。かくしてせっかくのチャンスも押しつぶされ、逆に書記長選の勝利や、委員選挙での進出から、民社につぐ第二党ということで、再びもとのもくろみにもどってしまった。

(C) 議会主義的進歩に埋没

翌六五年の春闘は、刷同執行部のもとで、組織問題をかかえ従来

(B) 統一戦線戦術の欠如した「中間総括」

これに対応する長船社研は、六四年十一月の分会役員選挙で、常勝社研も三名から二名に減少、票数も若干の後退をもたらした。さすがの社研も事態の重要性に気づいてか、これに対する「中間総括」を発表した。長船社研はピラをよく出すが、このような「総括」を文書で発表することは極めてまれである。従つて或る意味でこの時徹底的に内容を深めて、反合闘争にたいする対処と、全活動の総括にまで逆のぼつていけば、今回のような悲劇はまぬがれたかも知れないという、最後のチャンスでもあつた。かかる意味で重要な転機をむかえたのであるが、出された「総括」は残念ながらこれに應えるものではなかつた。たしかにこの選挙に敗北した直接的原因は、社研の支配していた青婦協の一同志による腐敗から、既成三派の一致攻撃によるものであつた。しかし問題をこのようなことにとどめることなく、根底的なものにまでメスを入れなければならなかつた。ここに提出されたものは、現象的結果の羅列であり、組合をどうするかということに貫ぬかれていた。しかも「刷同（民社）」の大巾な伸張、社研の一定の進出」という分析から「ここ一年間の全経過は今日の階級情勢下において、資本と御用路線の攻撃にたいし、社・共には全くその対決能力が欠如していることを示した。」といひ切っている。しかし現実には、日共の場合いぜんとして長船の委員長を占めているし、職場には民育を含めると二三百名はいるだろうといわれている。また同志会の組織こそ弱い、社会党支持者の多い組合員の状況などを過少評価していた。ましてや「今日の階級情勢の下においては」というように、これを一般化したならば実にオメタイ話である。このような理解から長船社研の組織活動方針は挙げて「反刷同」一本に絞っている。

「刷同対社研の対決」「階級的自覚の蓄積」反刷同路線の思想的

のベースメーカーの役割を果せず、そのまま「平穩」に終つた。世は挙げて参議院選挙に突入していった。驚くことには、三菱資本が前記したように着々本格的合理化攻勢の準備をし、刷同が企業連のレールを引いている時、もっとも革命的なはずの長船社研までが、参議院選挙に没入していったことである。春闘準備のさ中の二月に早くも、「前進」中核派と共産同マル戦派の三者で、選挙のための社労戦線を結成、中核派の浜野哲夫を全国区に立候補させることを決めた。この選挙が革命的議会主義とは無縁な、ズブズブの議会主義選挙であつたことは、いまさら言うまでもなからう。その帰結であり典型であつたのが、ひき続いておこなわれた北小路都議選である。日共でさえ当選目あてで党名をおろす候補は除名される。しかるに「都議会に新人を」というキャッチフレーズのもとに「前進」中核派の名はもとより、社労戦線さえもひき下げて「無所属」の選挙を行なつた。ただ一議席を欲しいばかりに、彼らの組織もまたこれを積極的に推進した。これでは代々木以下で「反帝反スタ」が泣くものだ。

長船社研は、立候補者をもつにせよもたぬにせよこの選挙戦を通じて、現に攻撃されている合理化闘争と関連させて徹底的に職場の中で争そわなければならなかつた筈だ。しかし「前進」中核派の社共に代る「第三の潮流」論におし流され街頭化していった。敵は十分なる準備のもとに本格的攻撃を、味方は無準備で対処を、これでは闘わずして勝敗は決せられたも同じである。

(D) 「闘う社研」に最後の期待

外堀を埋められそうになつた大衆の最後の反撃は、八月の三菱支部及び全造船大会の代議員選挙であつた。特に菱労選で従来の力関係を逆転、刷同十一にたいし、社研十四という躍進をもたらした。

合理化攻撃が進むにつれ労働者にたいする労働強化、しめつけが強まるなかで、不満が拡大、それが反映して労働者は、闘う左翼長船社研に最後の期待をかけたのである。続く九月の支部三二回定期大会では、従来押し進められてきた刷同コースを否決、合理化をなし崩しに認める反合闘争方針を葬り、「組織統一準備会」は白紙に戻された。刷同が一斉に役員立候補を辞退した中で、執行部は社・共社研のいわゆる「左派連合」によって作られた。その後の分会選挙でも刷同はボイコットをし、社研は第一党に躍進した。

(E) 刷同にたいする甘い評価

支部と分会の役員を引きあげた彼らは本格的な分裂策動を開始した。「第三二回大会後は、連日職場、支部集会、代表者会議を開催教宣と共に会員獲得につとめた結果、新労結成時点の会員一、二〇〇名を突破し、刷同の集会に集った会員支持者は延二、〇〇〇人を越えたと報告されています。」(注)ここでいう支部集会とは全造船二八会を指す。「新労結成の成功は多数の支持者の支援の結果でありますが二ヶ月に及ぶ刷同会員の必死の努力の結果でもありません。」(「経営と労働」三月号第二組合組織部長井上次好)と、この間における彼らの職場から切崩す必死の活動が述べられている。

一方長船社研は、刷同が引くことよって第一党になったにもかかわらず(現に票数は全然増えていなかった)彼らを過少評価し、このことの意味する「恐るべき陰謀」を見抜くことが出来なかった。ここでもまた完全に立遅れを喫したのである。「船舶、京製、横船など力強い職場のつき上げにおびえ、何が何でも連合会をデッチ上げて、その延命をはかるうとする姿があります。」(社研四〇一号)「刷同諸君はあせればあせる程、職場からうき上り、見離されつつあり」「刷同だけにまかせておけないと判断した会社は、他に着々

で「意見調整がつかぬまま支部大会にのぞむこととなった」(同)その結果同志会が真二つに別れて反対と保留に回り、「準備会設置案」は否決された。(注)賛成二〇(刷同)反対三五(社研十四共九、同志会十二)保留一〇(同志会)「大体の色別け」刷同はここにおいて大きな「誤算」を踏んだ。しかし彼らは「誤算」を味わったが、「勝算」までもは失なわなかった。一年間にわたる既成事実と「会社一つになれば組合も一つになる」という大衆の素朴な企業意識にのって、役員の上昇と分裂策動という彼らの常套手段に訴えてきたのだ。

(F) 無準備のまま刷同案を否決

三菱支部の長船社研を含めた「左派連合」は、刷同案を否決した場合、彼らがどのような手段で対抗してくるか、そしてこれにたいする対策まで十分考えた上で否決したのではなかった。長船社研は組織問題にたいし、「三菱支部の方針による戦術的統一」をもって望んだ。一般論としては正しくとも、恐らくこのような方針が受け入れられる現実的状况は、まだまだ遙か先である。従って三二回大会では刷同の方針が通る場合が大きいので、大会で少数派として筋を通すことに力点があったと考える。だから否決した場合、刷同がどう出るかを分析せず、彼らが引き上げた時の役員構成をどうするかは考えていなかったと思う。事態は「予想」に反して刷同案が否決された。否決した場合、当然、一年間にわたって彼らがしいたコースや四労働協で既に実質的な運営がなされていることに對する評価が問題になってくる。つまり、これらに對する労働者の幻想をどれだけ打ち破ったか、どのように闘ってきたかが問題となろう。更に同志会を一面的に駄目だと極めつけるのではなく、彼らの中にどれだけ介入していったか、そして職場大衆との結合、「左派内閣」の実

と布石を打ちつつあります。」(社研四〇六号)「職場における合理化、超動拒否闘争の進展は、刷同のギマン的ポーズをばくろしその結果長船における刷同の凋落がはじまったのでした。」(「組合分裂に際しての訴え」社研、傍点筆者)というように彼らの策動を「追いつめられた最後のアガキ」というように把握したのである。長船社研と一緒に全国社研を作っている「前進」中核派においても「彼らの支配が危なくなってきたためである」「彼らが組織分裂という最後の手段に出ざるを得なかったことを正しく評価し」「(「前進」二六三号)「社研や『三重工を強くする会』にはげまされて強力な反抗が進んでいることへの恐怖を示すものである」(「前進」二六四号)と同じような主観主義的分析におちいっていた。刷同がそれ程までに「職場から浮き上り」「凋落がはじまり」「支配が危なくなっていた」ならば何故第二組合が旗上げをし旬日をへずして、世にもまれにみるような早さで第一組合が崩壊の危機に瀕していったかの問題は少しも解明されないであろう。

合理化と企業連結はいわば車の両輪である。先きにも指摘したように六四年八月右派路線が確立した以後一年間にわたって彼らの敷いたコースを歩み、彼らにしてみれば三二回大会は「当然」従来の線が確認されなければならぬと考えていた。「刷同、同志会で構成されている中央執行委員会の原案である以上、刷同は勿論であるが、同志会もこれに同調し、本部案支持という形もあるだろう」(「経営と労働」三月号、二八会幹事横造分会長小野龍馬)事実全造船社会党員協議会においても「この四労働の合併方式の素案は、いわば三菱造船支部を通じて、全造船機械の意思がほぼ貫徹したものと云ってよかった」(「月刊労働運動」二月号永田一郎)と評価していた。ところが大会直前、刷同より「同盟加盟組合の協議会を別個につくることを認めてほしい」との提案をめぐり、同志会の中

力がどの程度持つものか等を含めて検討した上で否決してゆかなければならない。ところが現実にはこのような分析がなされず、刷同にたいする甘い評価と、たび重なる準備不足で「決戦」をいどんでいったため、後でみるような大動揺をきたすのである。このようなことが、今次闘争の直接的敗北の大きな原因の一つであろう。それは次のような事実によって裏付けされるのである。

(G) 大衆の「左派」——刷同に「錦の御旗」を与える

広職の支部脱退、長船内における署名活動に驚ろいた三菱支部の「左派連合」は、分裂策動の封鎖を理由に臨時大会を召集、再び刷同のしいた企業連コースへの方向転換をわずか二ヶ月足らずの間に決めた。十二月十五日の三三回臨時大会を前に、足元をみすかした刷同は、七日に二千名の新組合員を集め第二組合の旗あげを公然とおこなった。このような事態になっておかつ「方向転換」を決めたのである。これでは何のために、三二回大会で否決したのか、全く意味がわからなくなり、刷同路線の正しさを立証、彼らに「錦の御旗」を与えてしまったことになる。その上他の三労働組から加盟を蹴られ、みるもぶざまな状態をさらけ出した。このため労働者の中に一層の動揺と混乱を与えてしまったことは疑うべくもない。更に奇怪なことには長船において社研中心の執行部が事態の收拾を理由に、社党中心の挙国一致体制に切替えたことだ。事態がこの段階(既に過半数近く第二組合にゆき、この段階では最後にどれだけ第一組合に残るかという時であった)まで来てしまった時、話し合いと姑息な手段で対処しようとしても覆えられるものではなかった。かえって「やはり社研の行き過ぎのため」に分裂が起きたのだという敵の攻勢に手を貸す結果になった。そんなに自信がないならば、始めから責任を追究するような多数を執行部に出すべきではなく、職場に

そ固めるべきであった。つい二ヶ月程前刷同辞退の中で、「大衆に
応える左翼の責任である」と多数を執行部に送り込んだ、状況判断
自体を再検討すべきである。

(H) 組合主義に終始した社研、核心的問題は何か

このように次から次へと、わずかの間に方針の転換にせまられ、
戦闘的左翼をもって任じてきた長船社研が、右往左往しなければな
らなかつた理由はなんであるか。ここにこそまさに核心的問題が
あると考える。

最近になって社研の同志は「三二回大会で蹴ったことは誤りであっ
た」「あの時ならまだ三菱二万の戦闘性を保持しながら中で闘え
たのだ」「それでも合理化は来たであろうから、その時は闘えたの
だ」と述べている。これではここへきて全くの清算主義におち入っ
てしまふことになるのだが、果して当時そんなことがいえたであ
るか。企業連結成で組合の戦闘性を破壊し、合理化を遂行してゆく
のが、敵の企図ではなかつたのか。「重工八万労働者の統一」とい
う美名にかくれ、長船の左翼をがんにがらめに押えつけようとい
う企図があつたからこそ、諸君はそれと闘つたのではなかつたのか。
今日になってあの時呑んだ方がよかつた、蹴つた方がよかつたとい
うても始まらないのである。問題は当時如何なる視点で「蹴る」
という方針を立てたか、という考え方をこそ深めるべき内容なのである。
当時長船社研の諸君は「全造船三菱支部の戦闘性を守る」という
ことを自己目的に追求していた。つまり「全て組合をどう守るか」
という点でのみ対処していたのである。かかる組合主義的立場に立
つていたからこそ柔軟な戦術に欠けてしまったのである。言葉をか
えていえば、我々の革命戦略にむかつて、如何なる党を、如何につ
くってゆくかという基本的組織戦術をふまえた上での対処が必要で

言えない。どちらの場合にしても、嵐にむかつて社研自体が先づ、
従来活動の総括の上に立って「原則主義」や「組合主義」では対
処が出来ないことを自覚し、自からの転換を計ることが中心問題で
ある。より一層職場大衆との結合を計りつつ、反合闘争の弱点を再
検討し、如何に組織化を強めるかの基本的立場に立つことである。
その中には当然、未だ革命的左翼の力量が弱く、長船社研が全体か
らみれば、極めて突出している特種な条件も考慮されなければなら
ないであろう。これらの基本的視点にたつて、組合の組織問題は、
当時の状況、力関係、展望等を正しく判断した上で、どちらの道を選
ぶべきかを定めるべきである。

残念ながら、どういふ条件で呑むか蹴るかの問題は、我々の方に
資料が不十分のため、これ以上の判断を下すことは出来ない。この
ような企業合併に伴なり、組織問題は今後も起きてくるので、むし
ろこの上に立って長船社研からの回答を待ちたい。しかしいずれの
場合においても、既に述べたような基本的立場に立って考えなければ
ならない。この立場を抜きにしての、組合的処理はありえないの
である。

(2) 原則主義と大衆追隨の反合闘争

企業連結成問題にたいする対処の仕方が、極めて組合主義的であり、
しかも情勢評価が甘かつたことは既にのべた。反合闘争そのものの
経過でも、原則主義とそれが一転して大衆追隨になってゆくのである。
九月二十日長船においては十四項目全部にわたって一括反対の
ト権が投票比七〇%の賛成をもって確立された。続いてもたれた三
菱支部三二回定期大会で、右派による条件闘争方針を否決、長船の
方針が確立された。十四項目に昇る合理化案中、中心をなすのは職

あつたのだ。三菱支部を戦闘的組合と絶対化し、美化する必要は毫
もない。「左派連合」といっても本質的にはあい入れない社共との
連立内閣で、しかも社民のヘゲモニーで動いていたのではないか。
それすらも、時によって刷同に取られていたのではないか。だからと
いって勿論、現にある同盟系と三菱支部とを同列に置くものではない。
それはいうまでもなく、三菱支部の方がわれわれの意欲的闘
いに有利な諸条件があり、総評系と一定の統一行動をおこないながら
改良闘争の枠内でいかに戦闘化を計りながら、自己の組織を形成す
るかという路線を現在とはとるべきであることは、いまさら繰返すま
でもなからう。

この問題と関連し、「前進」中核派と思想を一にしている長船
社研に「戦闘的労働運動の防衛」路線、「前進」中核派の依りど
ころとしている三全総路線)なるものが、直接間接に影響している
ことを見逃すことが出来ない。考えてもみたまえ、今迄個々に戦
闘的に闘つた労働運動はあつたが、我々が本来固定して防衛しなけ
ればならないような、「戦闘的労働運動」などというものが存在し
ていたであろうか。こういう視点に立つから「戦闘的組合」を守る
ことを絶対化し、自己目的にするような立場から戦術を立てるので
ある。

我々の党建設の対象は三菱支部に限らず、同盟三菱や三菱労連内
の労働者をも対象にすることは当然である。改良的労働組合内で闘
いながら、同時にこれをのりこえる組織づくりをいかにすすか、と
いう立場から問題を考えなければならない。

当時呑むにしても、蹴るにしても事態は容易ならぬものがあつた。
企業連結成を呑んで外堀を埋められれば、条件闘争に移行し、なし
崩的に合理化が遂行されることは必至である。そこまで読んだ上
で、なおかつ力関係で呑まなければならないこともありえないとは

制の強化と各職場内の大巾配転及び、関連産業への出向と名のつく
配転(三菱重工から体のよい首切り)である。しかも第一次案でこ
の人員が長船で四九〇名全体で二六五〇名に昇るのである。敵はこ
の攻撃に当って、極めて巧妙な手段で実行してきた。最初に三名、
しかも職制による栄転であり、他の者も一万円アップと六〇才まで
の停年延長(本人は五四才で来年は停年だった)という好条件を出
してきた。これにたいし長船分会は一時間のストをやつて闘つたが
結局この人達は出向した。次いで第二回目も二名が同じような好条
件で出向したが、この時も十五分間のストと抗議集会を行った。こ
の時「条件も良いし本人もオーケーしているのに何でストをやるの
だ」という疑問が生じてきた。しかも「蹴つたって結局は行くでは
ないか」という敗北感が生れ、ストの結果、このような両面の役割
を果してしまった。第二組合はこの間隙を狙って「その具体的なあ
らわれとしてすでに長船分会では、提案された出向に対して、本人
の労働条件がよくなることと、本人の強い希望をも全く無視し、こ
れに反対リストを実施しました。」「はたして何のための組合であ
り、なんのためのストなのか」(ピラ)「新組合を結成」三菱長造労
組第二のこと)と攻撃をかけてきた。「ストのためのスト」だとい
うのは分裂主義者のいつも使う宣伝だが、問題は職場の中にどの
ように受け取られたかである。この場合はせっかく進出した分会の
「左派」がこの結果、急速に大衆の支持を失なっていたことを見
落せないであろう。だからこそ第二組合の分裂活動が成功したので
ある。労働者は第二が闘わない組合であることを知りながらも、台
理化から「自己を守るため」彼らの方を選んだのである。

それゆえ「平和時の分裂」では決してなく、文字通り合理化攻勢
のさ中における分裂であつた。例え三池や日産闘争の時のように、
長期のスト中ではないという意味で使つたとしても、事態の本質をア

イマイにする以外何の役にもたれない。「極めて平静のうち」に新組合が発足（二八会小野龍馬）「全く平和の内に改革が成功した例」「組合に平和的改革が」（二八会井上次好、いずれも『経営と労働』三月号）というように、刷同自身が、同じようなことをいつて、彼らは企業連結成を純然たる組合組織の問題であるかのようにつけて、敵の合理化攻勢と期をいつにして開始した分裂策動を、被い隠すために使用しているのである。我々はむしろこのような合理化と企業連結成が一体である本質をバクロし、闘う道を示すことこそ必要なのである。

何故このような混乱が起こるのであるのか。敵は明らかに初期の配転では、労働者を分断するためストの挑発をかけてきたのである。この時長船社研の中には「如何なる配転でも絶対反対」「合理化絶対反対」ということにはたいする観念的な把握があった。勿論以前から比較すれば是正されつつあったが、本質的な把握については疑問であり、戦術の硬直性を露呈した。

我々はいりまでもなく合理化にたいし絶対反対であり、この立場は如何なることがあっても変わるものではない。問題はこの絶対反対という内容であり、「絶対反対」を怒号していても現実の闘いを組織化することは出来ない。現実の闘いは労働条件をめぐって、彼等の攻防戦が展開されるのである。それゆえ我々は、絶対反対という基本的立場をふまえた上で、労働条件の維持向上の具体的スローガンの下に、組織化を計ってゆくのである。これにたいして民同は、あらかじめ合理化絶対反対という立場を放棄した上で、少しでも労働条件が良くなるようにと、いわゆる「条件闘争」にすりかえゆくのである。つまり彼らは近代化それ自体は社会の進歩であり、それ自身には反対が出来ない、との立場に立っている。従って既に向う

逆に合理化と企業連策動の本質をアイマイにさせ、改良主義者と革命家との差異を明確にすることさえ出来なかつたのである。

さらに「大衆はよくわからないで第二に大量に流れていった」「民社の支持票より沢山の労働者が第二にいった」ということから「第二組合のせい弱性」論を唱え、やがて来る第二次合理化で矛盾が激化するだろうという希望的観測に期待を託しても現実の運動には役立たない。既に新体制に移行する前には敗北は明白な事実になっていた。あの局面で長船社研の取る道は唯一つ「革命的敗北主義」の立場に立って徹底的に闘うことだけであった。あれやこれやの手の問題ではすまされない時点にきていたのである。まだ残されている第一組合員を中心に、徹底的に資本の企図と民社の攻撃の本質を暴露し、どれだけ組合員を階級的に高めるか、そして大衆「社研」をも含めて新しい党建設と活動家組織の再結集と組織化を押し進めてゆくか、が大切であった。こうして作り出される力だけが、長船社研の唯一つ頼りになる力であり、今次闘いに敗北したとはいえず、次の闘いへの前進をもたらす鍵になるのである。この基礎の上に立ってこそ、若干の組合的操作はあるであろう。しかしそれはあくまで副次的なものに過ぎない。あれやこれやの手を打ったが、結局最後に残ったものは当初予想した数と殆んど変らぬ最小の数となつてしまった。だとすれば結果論的にいって、あの局面では「革命的敗北主義」の立場を貫くことが改たてて必要であつたことを立証する。困難な時こそ共産主義者の真価が問われるというものである。

(3) 「こえ」と「前進」派の密月旅行

不可解な長船社研

現在長船社研は、極めて困難な状況にある。従って今こそこの教

側の士儀の枠内で、労働条件をめぐる闘いが、おこなわれるところに特徴がある。しかも「政策転換」闘争にみられるように、労働条件の守り方を、「国民的規模の闘い」にすらしたりする。また徹底的に闘う姿勢をくずし、ここでも資本と妥協しながら取引きしてゆくのである。

我々はこのような民同の方針を否定し、前記したような合理化絶対反対の立場で徹底的に闘ったからといって、それだけでは左翼組合主義者と何ら変わるところがない。革命的立場に立つ者は、この闘いを、改良闘争の限界と、資本のあくなき本質を暴露し、即自的労働者の憤激をばねにしながら、いかに向自的労働者に組織化してゆかかという問題との関連で進めるところに、本質的な差異があるのである。つまり大衆闘争と革命運動との区別と連関を、組織論的には大衆組織と前衛組織の区別と連関を明確につかみながら、革命的労働者を政治的に高め組織的に結集してゆくこと、ここにこそ革命家が戦略戦術論的、組織論的に追求しなければならぬ問題があるのだ。

残念ながら長船社研の同志は、将棋の歩にとびつき、四つに組んでいる間に、王は逃げ逆に飛角の攻撃を受けて敗退する結果をまねいてしまった。あの段階では資本の本当の企図をバクロし、職場の体制を固めつつ、ストは有効な時に打つべきであろう。

このような原則主義の破綻、大衆からの遊離は、一転して右翼路線になる。三三大会の右転換、社党を中心とした拳国内閣への屈服、社研独自のピラ配布活動の中止等、一連の話し合いによる取引きを行った。「どんな形でもよいから兎に角大衆運動を続ける条件さえ作ればよい」という、最近の「前進」中核派の活動とあい通じるものがあった。このような原則を捨てた活動は、労働者階級が困難な局面に遭遇した時、階級意識を高めさせることにはならなかつた。

訓をふまえた上で、長船社研は革命的左翼全体と、相互の忌憚のない討論を重ねながら、統一行動をとるようすべきである。この問題は長船社研が、後退の中で、再び職場労働者に依拠しつつ、革命戦線全体としては、何処と統一行動を組みながら、再建を計ってゆかかというに関係してくる問題である。

ところがここに到って事態は極めて不可解な方向に動き出した。「長船支援連絡会」にみられるように、我々の粉砕対象に挙げられている「日本のこえ」に支援を要請したり、統一行動を取り出した事実である。

現在構改派路線の中には大きな再編成が行なわれつつある。従来一口に構改派といっても二つの大きな違った流れがあった。一つは日共八回大会をめぐり、綱領上の違いから分裂していった、いわゆる春日派と称されているグループである。その後彼らの中にも色々な意見の違いが生じ、それぞれのグループに分かれていった。社会党へなだれこんだ統社同は別として、彼らは社会主義革命と構改派路線の他に、日共そのものの体質変革をも求めており、中間的、過渡的な性格をもっていた。従って彼らの中心をなす社革自体にもあきたらず、国際共産主義運動それ自身にたいしても若干の相対的独自性を発揮する部分や、労働運動などを通じ構改派路線の右翼的本質に批判を加え、若干の部分は我々のスターリン主義を批判する陣営にさえ近づいてきた。また社革自体の中にも実質的には独立したグループとして活動しているものもあつた。それに較べ「日本のこえ」は、日共内の中共派とソ連派の対立に過ぎない。彼らが派閥闘争で破れたがために、外に追い出されたが、本質的には何ら変わるものではない。勿論個々の下部黨員の中には「まじめ」に考えている者もいるであろうが、本質そのものは変わるものでない。従って四名の中央委員を中心に根強い官僚制が支配している。最近構改派全体にた

いする結集運動が起り、上部でも下部でも完全に「こえ」がヘゲモニーを取って再結集を計っている。社革は既に政治的にも組織的にも完全にゆきづまり、破綻に瀕していた。そのため八回大会離脱組は離散し、運動から去るか、自己を前向きに転換させるかの岐路にたっていた。まさにこの時「こえ」のヘゲモニーによって構改派のテコ入れと結集が進められつつあるのだ。そのため彼らは各所で何々労研、何々戦線という形で下からも体制のたて直しにやっきとなっている所に特徴がある。しかも彼らは現在の「結集」はワンステツプであり、ツーステツプは代々木派を含めての「総結集」であると述べているのである。このことは歴史を大巾に逆転させる全く反動的なもの以外何物でもない。勿論彼らの結集は両者共落ちぶれてゆく者どうしの結集であり、方針もあいまいなために、合同時が組織的ピークであり、以後必ずや新しい矛盾が激化してゆくであろう。これに対し各独立グループや社革の中にも結集に反対している部分がある。これらの諸君とは色々な形態での統一行動が必要である。その場合といえども、平和共存論や一国社会主義論など我々の基本的路線に関する大きな違いがあることを忘れてはならない。従ってこれらの諸君が一層自己変革をなすよう思想闘争しなければならぬ。これに較べ現実はこの結集運動に参加している諸君に対しては相手が多様な所にいる人でも、如何なる意味においても、断固としてその本質を暴露し、闘わなければならぬ。我々は中共派共産党を打倒すると共に、ソ連派共産党をも粉砕しなければならぬのである。

かかる時期に、「こえ」を含めての統一行動は結果的に彼らの結集に手を貸す以外何の役にもたない。「前進」中核派は現在各所で「こえ」を含めた統一戦線に血道を挙げ一緒になって労研や戦

に在駐していたK君も、ただの一度も逢おうともしない。革命戦略として粉砕すべき対象である「日本のこえ」と逢う「雅量」があるならば、革マル派と逢えない理由はないはずだ。長船社研と革マル派の両者には、四、五年前に、「事実問題」云々で分裂状態にあることは事実である。第三者である我々には今ここでそのこと自体について、とやかくいえない。ただいえることは、恐らく、それらの「事実問題」云々の背後に本質論上の問題があったと思う。これらの本質論上のことを避けて、「事実問題」云々が、前面におし出される。そこから革マル派は切って、一見暖かく政治的に迎える構改革と手を握るという方向では、私は納得出来ない。何故ならば、この問題は革命的左翼の統一戦線にかかわる基本的な立場の問題であるからだ。従来革命的左翼の中で、「今のような活動を続けるならば、必ず破産してしまうであろう」と、長船社研にたいしもっとも強く批判していたのは、革マル派であった。このことは内外共、皆なが認めなければならぬ事実である。それゆえ、過去に色々ないきさつがあったとしても、今こそ、社研の方針に無批判的に追随してきた者達より、批判者の意見こそ傾聴すべきである。この中から学び、革マル派とも、統一行動を深めることが、新しい出発の第一歩を切り開くものであると確信する。

現在財政的に極めて困難な状態にあることは推察出来る。しかし我々の財政問題は、政治の問題と切り離して考えることは出来ない。財政問題だけを切り離して、自己目的に解決しようとするれば、結局原則をも踏みはずしてしまう場合があるので、十分に注意することを希望する。

最後に結論的に問いたいのは、若しこの段になってもなおかつ反省しないのならば、いまや「前進」中核派や長船社研の諸君は、「一体どちらの方向をむいて活動しているのか」ということだ。つ

線を作り彼らの荷立てになって活動している。そのもっとも典型的な一例は都職労における労研であろう。従来彼らは共産同マル戦派と労研を作っていたが、マル戦派を切って、「こえ」と「社革」と一緒になって労研を作った。

我々の陣営の中には、統一行動や統一戦線戦術にたいし非常に大きな混乱と誤まりがある。個別企業の労働組合内において、箇々の問題をめぐり、その時点その時点において、構改派や社・共とさえ統一行動を組むことはある。そのことと我々の粉砕すべき対象である組織と、一緒になって労研や戦線を作るということは自ずから別の問題である。この点の混乱は自己の組織の原則性さえ、あいまいにしてしまうものである。

「前進」中核派の誤まれる路線は、長船支援問題にも現われた。それどころか長船社研自身も全く無原則的な動きを開始した。昨日までソ連派路線の打倒を叫び、ソ連体制については「官僚制国家資本主義」だと、大層「カライ」評価を下していたものが、ソ連派共産党を名乗る「こえ」に支援を要請したのだ。いくら金のためだといえ、このようなことをすれば、結局彼らにそれを利用して「トロ派も遂にゆきすぎたり、我々に泣きを入れにきた」といわれても仕方がないではないか。現に「日本のこえ」八〇号では「合理化闘争に多くの教訓」と題して「社研」グループの一活動家は、「五年間のたたかひの中で、わたしたちは「合理化絶対反対」だけではたたかえないことを学びました。」と長船社研の「方針転換」に賛辞を呈しているではないか。主観的意図は別としても客観的にはわずかの資金カンパのために、「こえ」に利用され、彼らの再編成に手を貸す結果になっている事実を何と考えるのか。

その上同じ反帝反スタ戦略を唱えている革共同全国革派的マルクス主義派（略称革マル派）とは、組織として勿論、四ヶ月も東京まり「革命的左翼の結集」なのか、「反代々木連合戦線党」なのかということだ。それゆえ君達の思想性そのものに問いかねなければならぬ時がきたようだ。

(五) 社研の歴史的総括のために

(1) 社研の発展経過

このように今次闘争の過程や評価をめぐって、露わになった対立や長船社研の弱点は、突然に現われてきたものではなかった。以下社研の発展過程を振り返りながら、基本的問題点を明らかにしてみたい。

戦後の労働組合運動がそうであったように、日共の誤まれる指導のため、産別会議の崩壊とレンドバージュによって、組合運動は壊滅的打撃をうけた。その中で日共細胞は全滅の憂き目をみだし、三菱長崎造船所においても、この状態から免がれることは出来なかった。この中で日共細胞が、現在の社研の中心メンバーによって再建されたのは一九五三年であった。そして五七年秋の賃上げ闘争、五八年夏から秋にかけてのエリコン闘争によって、長船労働者の戦闘性は再び息を吹き返した。細胞は闘いに対する経験と確信を得る一方、ソ連共産党二十回大会、日共綱領論争、警職法、安保闘争をへる中で民族主義に反対し階級的視点を立たねばならぬという立場を確立した。さらに、日共の裏切り、国際コミニズム運動にたいする不信を突き出し、集団離党から社会主義研究会を結成したのである。その後数々の闘いの中で、もっとも精力的な活動によって今日みら

れたような、長船労働者の中で相対多数の力を得るまでに発展していったのである。

この過程はおおよそ次の三つの段階に分けられる。第一期は長船社研の前身。一九五三年日共細胞再建から六〇年一月集団離党まで。第二期は社研の理論的基礎を生み出す時期。長船社研結成から六三年末或は六四年始め頃まで。第三期は組合への進出、外部への進出時代。内部的には、それまで続けてきた「社研」機関誌の停止、十一月組合機関への進出。外部的には、六四年一月旧ブンド系と全共労協結成、四月革共同「前進」中核派と交流再開、「三菱重工の組合を強くする会」の発足、さらには全国造船社研結成等から、六五年末の組合分裂、社研の敗北まで。

このような発展過程をみてきた場合、はじめにいえることは、既成三派に較べ、もっとも歴史の浅い長船社研が急速な進出をみたのは、三派に比しては何処よりも革命的であり、大衆にたいし献身的であったということである。特に既成「左翼」の社共、なかんずく「革命政党」を名乗る日共が、如何に日和見政党であるかを暴露し、革命的左翼といわれる新しい運動に関心をもちさせた。また日共細胞再建時においても、長船社研結成とその後の指導においても、決定的役割を果たしたN氏の、組合運動における技術的指導や、日共時代からの運動の基盤もあって、戦闘的組合主義としては、もっとも急速に発展していった典型として挙げることが出来よう。

だがしかしこのような表面的発展とは裏腹に、「原則主義」と「組合主義」による理論的思想の誤まりからくる危機を深めていったと考える。そこからする反帝反スタ戦略の観念的理解と、その基本的組織戦術にたいする無理解から、今日のような破産をもたらしものがあつたと思う。その内容について以下の項で明らかにしてゆきたい。

さに階級闘争そのものであることが示されたのです。」と記されている。ここでいう「階級闘争」という言葉は極めてアイマイである。一般的に今日の階級社会における対立は階級闘争である。これを言葉通りに受けとつたら、同義反復で何を言っているのか全くわからなくなる。これを「革命闘争」と置きかえてみると、長船社研は何を言いたかったのか明瞭になってくる。つまり反戦闘争は階級闘争だ、階級闘争は革命闘争だ。そこから反戦闘争は革命即帝國主義打倒の闘争、になってしまふ。このことはさらにソ連の核実験問題をめぐり、いわゆる「米ソ核実験反対の革命的な反戦闘争」の論争をめぐって一層きわだつた特徴を示した。

これらの特徴的なことがらを、まとめてみると次のような問題点がある。

(A) 反戦闘争より勸評は「高い」闘いか

第一に背景をなす歴史的問題点として原水禁運動に、勸評や警職法或は岸内閣打倒を持ち込み、「階級闘争」に切り換え、一步「高い」闘いを組もうとしたことである。

これは五九年から六〇年初めにかけて、日共がズブズブの中広イズムで原水禁運動を進めていた際、ブンド全学連によって主張されたものである。当時社学同は、階級的視点を確立することによって、反戦学同から転換を計った。そしてこのような闘いの組織化方針は當時はやった、いわゆる「学生運動転換論」の内容をなす重要なものであつた。

ここでの問題は、原水爆禁止の闘いと勸評闘争とは、それぞれ関連は持っているが、おのずから別個のものであり、原水禁運動の中に、勸評を持ち込んだからといって、質的に運動が高まったことを意味しないということである。そのように誤った理解があつたから

(2) 無内容な「原則主義」

「原則主義」の問題は、革命的な反戦闘争に関連するエリコン闘争や米ソ核実験反対闘争およびソ連論などに、具体的な問題として現れている。また労働運動に関連する合理化反対闘争や賃金闘争の組織化についても同じようなことがいえる。

「その報告を聞いたとき、われわれはみんな目からうろこが落ちる感じがした。一番大事な点をわれわれは忘れていたのではない。もっとも単純素朴であるが、労働者と資本家、賃労働と資本の対立ということを落していたのではないか。それが深刻な反省となつた」(「長崎造船社会主義研究会の歴史と活動」労働者同盟準備会「通信」より以下通信よりとする)と階級的視点をエリコン闘争の中から学び、細胞の思想的転換をつくる決定的闘争であつたと位置づけている。たしかに当時日共中央の民族的視点より決別し、社会主義革命路線の方向を明確にしてきたことは、一定の前進である。そして転換の契機を作つたという限りにおいては、諒解出来るが、それはあくまで問題の出発点をつかんだに過ぎない。必要なことはそのような出発点に立つて如何に闘いを組織すべきであつたか、また闘えなかつたかである。つまり現在の場所的立場に立つて、再度総括をしなければならぬ。この点で「三重工合併と労働者階級」(三菱重工の組合を強くする会準備会発行のパンフ以下パンフよりとする)によれば次のように指摘されている。

「そこには、一切のお喋りを超えた賃労働と資本の峻厳な階級対立がハッキリと貫かれていたのです。そして激烈な死闘を通じて、それまでの『平和運動の指導方針』が次から次へと破産し、無力なことがばくろされていった過程でもあります。」「平和運動と階級闘争とはいかなる関連をもつものか」更に結論として「平和闘争はま

こそ、後に革命的な反戦闘争にたいする過少評価が生れたのである。勸評闘争それ自体の中にも、改良主義的に闘おうとするものと、革命的に闘おうとするものとの争いがあったのだ。ただ当時階級闘争の焦点が勸評や警職法や安保と続く中であつたからこそ、これを中心に据えたのである。そのこととそれを原水禁運動に持ち込んで「高めよう」とすることはおのずから別である。今日、社会党系のヒューマニズム一般に解消する「原水禁」運動に対抗し、共産党系の「原水協」運動が「敵を明確にせよ」といって、米帝打倒を持ち込んでいることを比較すれば明瞭である。そこには内容こそ違え、その思考方法において、本質的に何ら変りがないのである。

(B) 反戦闘争を否定

第二に、今日の状況を無視し、レーニンの原則論を教条主義的にそのままあてはめ、革命的な反戦闘争を否定する立場である。

この闘いの問題には左右両翼の誤りが存在している。一方は構改革や社会党の中にある理論であり、彼らは原水爆戦争のもつ人類「絶滅」の危機から、つまり戦争の形態変化から、逆に戦争の階級的性質までも変化したと考える。そこから「平和共存」と平和それ自体を自己目的にする小ブル平和主義者に転落してしまふ立場である。日共も本質的にはこれと変りはない。ただ彼らは中ソ論争激化の折から中共派に組みし、「左翼」的ポーズをとるため「米帝打倒」をつぎ木することによって右往左往しているに過ぎない。

他方旧ブンドや長船社研に代表される諸君は、鉄砲撃ちあいから原水爆戦争という大きな形態変化と、それに伴う労働者階級の危機意識の変化に目をつぶり、レーニンの原則論を教条主義的にあてはめている。

私もスターリニストが唱えているような平和を自己目的にする「

平和擁護闘争」などというものは誤りであると考える。だからといって、逆に今日大衆の中にある原水爆の危機や、平和を守りたいという要求を無視することは出来ない。レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」という「社会主義と戦争」にある原則を、無条件的にアテハメてみても問題は解決しない。

今日、原水爆のもつはかりしれない破壊力にたいし、広汎な大衆の中にはかつてみられないような危機意識が存在している。この危機意識を如何に革命的な反戦闘争として組織してゆくか、そこにこそ当時米ソ核実験反対のスローガンの意義があったのである。そして現在ではベトナム反戦闘争を、どのように組織化してゆくかという問題につながってくるのである。

(C) ソ連核実験反対が何故「ソ連論」論争になるのか

第三に、我々の運動の出発点を、大衆の中に存在している意識（例、危機意識）や要求からでなく、経済学的説明や社会の本質規定から始めることである。

この点は前記した「第二の項」で原則からでなく、危機意識から進めなければならぬことを指摘した。同じようなことはソ連核実験反対の闘いが、なぜ「ソ連論」論争になってしまったか、ということと関連している。その頃長船の青年部や労働組合ではソ連論がストレートで持ち込まれ論議された。ソ連核実験に際し「ソ連論の本質規定と結合しつつ大胆に批判を展開し」（長船社研機関紙『社研』二八、九合併号）とある。この「本質規定と結合し」ということは、我々との論争の中で、「ソ連は社会主義でないから核実験をやるのだ」という理解になっている。（注）このような理解だと裏をかえせば、社会主義であつたら核実験をやっても良いのか、ということになる。現に革命的左翼と称される一部には、社会主義で

論理）は誤りである。つまりそれは、いまだ社会主義ではないという証明にはなるが、ソ連の現状を分析して、どのように止揚してゆくの實踐的立場ではない。必要なことは、ゆがめられた過渡期社会を世界革命との有機的連関において、革命を組織させ、全世界の労働者階級と共に、解放を闘い取ることである。どうしても性格規定が必要なならば、我々は「労働者国家の官僚による歪曲された疎外形態」とでもいうべきであろう。

(E) 改良闘争と革命闘争との区別と連関

第五に、「平和闘争はまさに階級闘争（革命闘争）そのものである」という理解についてである。この問題は言葉をかえていけば改良と革命との区別と連関に関することである。

我々は、平和闘争（改良闘争）の直接延長線上に革命闘争を考へることは出来ない。個々の改良闘争（反戦闘争や反合同争、賃上げ闘争など）それ自身が、改良主義的あるいはスターリン主義的に犯されているなかで、これをのりこえていかに戦闘的に展開させるかという課題が、それ自身として一つあると思う。同時にその過程の中で革命組織（党）をいかに創造的に作り出してゆくか、そしてこの二つの関連をどのように把えてゆくかの問題がある。

このように作り出されてきた革命の担い手の組織、党が媒介されない限り、不断に闘われている改良闘争を革命闘争に結びつけることは不可能なのである。それゆえ即自的労働者を、いかに向自的労働者に意識変革させ組織化するかということが、日常不断に重要な課題となってくるのである。

ついでに、一部に若干の混乱があるので明らかにしておく点としては、このように建設さるべき革命主体の問題をぬきに、革命を論ずる誤りに関することである。逆の言葉でいえば危機的情勢と革命

あつたら核実験をやってもよいのだという立場がある。また現に中国核実験さえ支持するよりな驚ろくべき見解がある。これはこれ等重要な問題だから、いずれ別の機会に明らかにしたい。」このような見解で訴えるから結局、「ソ連が社会主義でなければ何だ」ということになる。日共はソ連核実験、軍拡競争から意識的に大衆の目をそらせるため「ソ連論」論争にもちこむのである。これにたいし長船社研は青年部集会で、「答」を出さなくてはならなくなった。そこでまだ十分研究されていないソ連規定を、「官僚制国家資本主義だ」とのべざるを得なくなったと考へる。このような論争は組織論からみれば活動家組織と大衆団体との混乱があり、明きらかにゆき過ぎである。同時に大衆闘争の組織化にあつたので、その発想法が誤っていると思う。

(D) ソ連論における裏返し

第四に、ソ連論論争にみられる原則主義である。

いまここでソ連論を説明することが主題でないで、具体的なことは略し、方法的なことのみ明らかにする。我々も今日のソ連社会が、一国社会主義建設から共産主義社会を夢想したり、官僚制度による支配体制や、資本主義との平和共存路線を歩むソ連が、社会主義であるとは考えられない。だからといってその裏返し「資本主義」であるという理解には納得出来ない。

資本主義から社会主義への過渡期にある社会、しかもそれは経済的後進国に発生し、世界革命の敗北と孤立にあり、一切の左翼反対派が根こそぎ弾圧されるといふ、極めて畸型化した社会である。そのようなものにマルクス社会主義論（本質論）である「ゴーター綱領批判」や「マルクス価値論」を一対一的に対応させ、比較して、そこから結論を導き出す論理（本質論をそのまま現実にあてはめる

の實現との混乱である。この場合に一つの現われている傾向は、経済情勢分析からストレートに、革命が現実可能性の問題として状況判断を降すことである。これらの問題についても、今后もっと科学的な分析と討議が必要であると考へる。

(F) 不況＝合理化か？

不況や合理化反対闘争にたいしても、次のような見解がなされている。六二年十二月二十日付「社研」三五号で「不況という現象は資本主義が続く限りなくなることのない本質的なできごとです」「不況に対して労働者は医者になるのではなく相続人たるべきである」と。たしかに「不況」にたいする労働者階級の一般の見解を宣伝することは、それ自身として間違っているとはいえない。しかしここでも反合同争それ自身を、いかに戦闘化するかということが明確にされないため「立場の強調」に終っている。

しかも六五年八月十三日の社研号外三七二号や十九日付号外三七六号で、反合同争を推進するにあつて経済危機、「不況」にたいする労働者階級の基本的姿勢として、同じような趣旨が述べられている。六五年八月といえはまさに三重工合併に伴ない、六月に会社の合理化専門委員会の発足、七月に合理化項目中間報告の提示が行なわれている時である。

「『死の病床』にある資本主義の回復（資本家的危機打開）をねがうことなく、一切の合理化に反対して労働者の生活を守ると共にこうした階級社会が一日も早く息をひきとるよう、力一杯闘いぬぐべきである（社研号外三七二号）」と訴えている。これではまるで今次の三重工合併が、「死の苦悶」にある資本主義の危機から、直接その回復策として打ち出されたような一面的把握になる（いやそのように考へているのかも知れないが）。当時「一般的にいって」「不況

は深刻であるといえようが、そこからストリートに反合闘争を訴えることには論理の飛躍がある。

このような混乱の背景をなしているのは二つの点が考えられる。一つは資本主義の経済恐慌の形態を、いせんとして古典的形態において把握しているということ。第二に不況と合理化の関連がはつきりさせられていないこと。合理化それ自身は資本の運動法則であり不況期には資本の集中合併が一層強化し急速に進められるものである。しかしながら不況イコール合理化ということにはならない。つまり資本の運動法則である合理化が、それぞれの局面でどのような特徴をもって現われるか、この特徴の内容を具体的に暴露し、これへの闘いと組織化を計ってゆくことが任務である。

(G) 賃闘にみられるサンジカリズム

賃金闘争にたいする原則主義的把握も、同じような形態で現われている。例えば機関紙「社研」十七号の「賃金の根本にふれて」その本質を「賃金とは、利潤を生み出すために投下された資本の一部である。これが社研のとり立場である。」「賃闘の姿勢は、かかる賃金の本質と対決し賃金制度を資本主義それ自体の打倒の立場でなければならぬ」と。

前者の問題は「賃金の本質」にたいし、中間項を抜きにした混乱がある。後者はマルクス賃金本質論と、現実の労働組合が個別的に賃金獲得闘争を進めている問題との区別がなされていない。それゆえ賃金獲得闘争それ自身を現実の改良主義的、スターリン主義的歪曲をのりこえていかに戦闘化し組織化するかが欠落し、賃金論にすりかえられてしまっている。逆にいえば、現実の賃闘をかかる立場（賃金制度廃止の）で徹底的に闘えば、その直接的発展線上に賃金制度を資本主義それ自体の打倒（革命）があるかのような錯覚を

主義をのりこえるものとして、いかに組織化するにたいする軽視と要求（政策）とそれを実現するための組織戦術との統一的追求の無視とがある。

賃金問題にしても、我々の闘争目標は「要求額獲得闘争」だけに絞られるものではない。資本家は労働者を低賃金で支配するだけでなく、職務評価や人事考査あるいは技能検査等、色々な賃金管理や一方的裁定を押しつけ労働者の中に分裂支配を持ち込んでいるのである。それゆえ我々の闘いは、賃上げ額のみならず、賃金体系やその支払い方法など、彼ら全体の労務管理として、これにたいする闘いを組まなければならないのである。

これらにたいする具体的闘争過程で、一方で、マルクス賃金本質論をふまえたうえで、現代の賃金問題にいかに関連するかの賃金論を明らかにすること。他方で、党の組織化との関連における賃金労働者の、闘争の組織化に関する要求形態、運動形態、自覚の過程、組織過程などの賃金闘争論を深めてゆくこと。これらにわたってより一層創造的理論を発展させるよう努力しなければならないのである。

(3) 党組織づくりにおける組合主義

次に組合主義に關係する問題点を明らかにしよう。同時にこのことは党に關する理解にも關係する問題である。

(A) 理論活動の軽視

第一に、組合主義の直接的現われとして、機関紙「社研」の停止と

おこさせるということだ。このような立場の強調は一見革命的であるかのようにみえるが、サンジカリストの立場に転落してしまっている。つまり賃金制度の廃止という問題は、資本主義制度の打倒を目的意識的に自覚し組織化された党の媒介なしには出来ないものである。ここでも「E」で指摘したことに関連してこよう。

このような理論的混乱と原則主義のため、現実の賃金闘争では「立場の強調」に終ってしまっているのである。また多分に誤解があったのであるが、或る組合大会で「賃金制度の廃止」というスローガンを生で出して驚かせた話が伝わったり、現在は知らないが、最近まで「賃金理論」などというものは無い、という主張がなされることにもなるのである。

(H) 立場・要求・組織戦術について

革命的左翼と称されている諸君の中には、労働運動にたいする非常に大きな混乱がある。

「賃上げは一律大巾、合理化は絶対反対、抵抗闘争で抵抗組織を」という単純な論理である。しかもこれ以外のことをいうやつは「構造改革」論者だという考え方だ。しかし考えてもみたまえ、幾百万大衆を決起させるのに「断固闘え」を怒号したからといって、立ち上るものではない。労働者階級が動き出すのは、自からの要求を突現させるためである。このような混乱は、経済分析を基礎にした社会の本質から導き出される我々の立場と、革命論の範疇に入る、改良の枠内だが変革的なものとして提出される要求（闘争戦術）と、組合作りの中で党づくりを追求する実体論をなす組織戦術との区別が明らかでなく、立場の強調から現実の運動を切断するところからきている。そこから、このような要求闘争を改良主義、スターリン

「理論活動」の軽視、「独自活動」をビラ配布活動に解消してしまふことを挙げなければならない。

長船での活動が第三期に入ると共に、一面労働組合役員への進出諸派への権威の高まりとは裏腹に、内部的危機を深めていった。六三年三、四月頃まで不十分であったが、それまで続けてきた「社研」の機関紙がとぎれとぎれになり、六月十五日号をもって以後全く停止してしまつた。勿論内容的には多くの試行錯誤を含んでいたが、兎に角理論的活動を続けていた。ところがここに致って全く「創造活動」を放棄し、組合活動に没入していったのである。だからここさきにも指摘したように、六二年十二月に出した「不況」一般にたいする見解が、六五年八月の時点で同じ内容を無感覚に出すのである。それ以後唯一の「独自活動」としてもっぱらビラ活動に専心するのである。大衆を一定の行動に立たせる時、その限りについて有効な手段ではあるが、所詮大衆の意識変革をなしとげるのには限界がある。現時点ですべて我々の運動は、新しい創造的活動である。それゆえビラ作りとビラ配布活動に追い回されるより、一つ一つの闘いを総括し理論化する、地道な活動を重視すべきであったと考える。

(B) 客観主義と「長船共産主義」

第二に、このような背景にある考え方として、旧ブンド崩壊にたいする客観主義と「長船共産主義」的考えである。

旧ブンドは安保の敗北と共に、分派闘争がはじまり、何ら生産的な方向をみい出せないまま崩壊していった。それゆえ若い同盟員の受けた打撃は大きく、また全学連と共に決起した、東京港地区、大阪中電、長崎造船所の同志もより一層苦痛を味わった。それゆえこの苦痛をかみしめ、これを乗り越えなければ、次の前進がないとい

う状態をもちた。

ところがそのような時点について、東京から非常に離れていて直接渦中になかったとはいえ「長船社研の歴史と活動」の中には苦悩の「カケラもないような総括しかのっていない。「そういうわけでブンドに入るのを決めたのは五月だが、六月以降ブンドは分裂を開始し、雲散霧消していく。その中で長船の組織だけは、政治組織として、ブンドに入る前もそのあとにも変ることなく機能していくことになる。」「安保闘争三池闘争をわれわれもせい一ぱい闘ったが、理論上の最大の関心はソ連論だった。」(通信より)と。当時長船社研の諸君にしても、事態をもっと深刻に考えていたことだと思いが、ここでは驚ろく程の傍観者的な総括になっている。この中には幾つかの問題点があるので明らかにしておきたい。

(イ) ブンドにわずかしかなかったということから自己合理化を計ろうとしている。

「六月以降ブンドは分裂を開始し、雲散霧消していく」とあるがこれは全く事実と反する。分派闘争は八月以降で、六月の時点では「六・四ゼネスト」「六・一五国会構内突入闘争」「六・一八一九徹夜動員デモ」「六・二二ゼネスト」と打ち続く闘いの中で行動上の一致はみていた。問題はむしろこの闘いの中で、色々出されてきた意見を理論的に整理し、或る場合には思想的対立にまで明確にできなかったことにある。「安保を勝利させるため」行動の一致のみにおわれ、理論的・思想的対立を明確にしなかった。そのため七月末の臨時大会に混乱を起し、八月に分派闘争が無原則的に繰り広げられる結果になったのである。このように事実と相違してまでこのようなことをいうのは、自己合理化が注意深く隠されているからだ。つまり「五月に入るのを決め、六月には雲散霧消していった」のだから、我々には関係がないともいいたいのであろう。それゆえ「

その他、地区党指導による犠牲はそんなに大きくはなかった」(通信より)ここでも基本路線の悪影響と活動スタイルを切り離して「自主的活動」を強調している。果して活動スタイルを基本路線と切り離して語ることが出来るであろうか。

「新しい綱領が採用されてからのちに起ったいろいろのことで」と、党の経験は、綱領にせよめられているすべての規定が、完全に正しいことを実際に証明している。」(日共六全協決議)つまり戦略は正しかったが戦術が間違っていたという、後には更に「戦術」が「活動スタイル」の問題に解消されていたのはあまりにも有名な話である。

(ホ) 地方共産主義

六全協に接する考え方も、旧ブンド崩壊時もそうであるが、全国組織による全国的な問題と、自分らの活動の問題とを区別しているところに特徴がある。この背景は、自己の活動の合理化と、党にたいする地方共産主義の考えが根底にあるといわざるを得ない。つまり党であるならば、全国組織と細胞とが必要であり、その関連が明確でなければならぬ。地方組織から順番に、全国組織を作ったゆえに二重りつになつて明確でない。若しそうでなければ、全国組織の一部として、自己を位置づけなければならぬ。勿論そのことは党にたいする、本質的内容的なことを意味して、理論的に一致しないまま、他の「全国組織」に入れば解決つくという問題をいつているのではない。このように自己をたえず、全国組織の一部としてとらえていけば、全国組織の破産や、全国的な問題を己れ自身の問題として、とらえ返さなければならぬのである。

(ハ) 反スタ運動の無理解

「革命的左翼の分裂は結局ソ連論だ」(通信より)という理解で

ブンドに入る前もその後も変ることなく、政治組織として機能していくことになるのだ。結局ブンドは「仮の宿」だったのだから潰れようとして、どうしようとして我々には直接影響はないから、独自の道を歩んだのだというのである。

(ロ) 中心がソ連論か？

更に驚ろくべきことは、当時「理論上の最大の関心事」が「ソ連論」だったということである。たしかに我々が革命戦略を追求する場合「ソ連論」は重要な問題には違いない。しかし安保三池を闘い、ブンドの崩壊という重要な過程をへる中で、どうして中心的関心がソ連論になるのか全く判断に苦しまざるを得ない。当時の課題はいかなる党をいかに作ってゆくかが中心でなければならぬと思ふ。

(ハ) ブンド崩壊からの教訓を

当時誰しもブンドがそのまま前衛党に発展するとは思ってもしなかったであろうし、結果的に「小ブル急進主義者の集団」であったかも知れない。しかし自から全国的政治組織としてブンドを選んだ以上、それにたいする責任は、はっきりしなければならぬ。つまり一定の革命戦略のもとに、前衛党をめざして闘ったが、何故無惨な形で崩壊してしまったかを、己れ自身の問題として受けとめ、反省しなければならぬのである。このような検討が深刻になされていけば、後に「悪しきブンド主義」を矮小化した「前進」中核派と融合するような結果は生れなかったであろう。

(ニ) 六全協に対する態度

党にたいする客観主義的発想法は、六全協に接する考え方にも現われている。

「基本的路線に於てはその悪影響下にあったが、日常の活動スタイルでは六全協で確認され強調されたような運動のあり方に近いものを、われわれは自主的にそれまでもやっていたので、引きまわしある。たしかに外国のトロ系運動の中にはそのようなことがいえる。しかし日本においては、初期の頃はともかく革命戦略とその組織戦術をめぐっての分裂である。諸外国のトロ系運動が延び悩んでいるのに比較して、日本の革命的左翼は歴史も浅く四分五裂しながらも総体として発展している。これはまさにこのような実践的問題をめぐって、論争がなされて来ているからである。しかも反帝反スタという特異な創造的革命戦略を打ち出しているところに特徴があり、急速な進歩をもたらした鍵があるのである。

(三) 党と活動家組織の二重写し

第三に、社研組織の問題点として党と活動家組織との二重写しという問題を挙げなければならぬ。

長船社研という場合二つの側面があった。一面は、「細胞」としての社研であり、他面は活動家組織としての「社研」である。しかも細胞としての「社研」は、活動家組織としての「社研」指導部を兼ねていたようだ。このような二重写しから、活動家組織の「社研」を独自に確立、発展させることをしなかった。活動家組織の「社研」からの指導部を選出させる必要がある。そして活動家一般と、会員として活動に参加するものとを区別し、自から活動家組織としての機能を発揮させるようにすべきである。このような区別と関連を明らかにしないと、細胞としての「社研」自体が、活動家グループに薄められてしまうのである。その上両方共全部ストリップにしていることは、組織論上の誤りがあった。つまり現存する社研が、そのままストリートに前衛党に発展し、革命を遂行出来るかのような見透しがあつたと考える。だが活動家組織と党組織との間には断絶があるのである。このような混乱と誤りが、今次敗北とそれに伴なり

再建を一層難かしくしていったのである。

(D) 根底にある組合主義

第四に、党の基本的な問題としてこのような結果をまねく基礎には、その根底に組合主義があるからである。

かつてブンド全学連が安保闘争を闘った時、主要メンバーは全部全学連グループに出て、次々と検挙されていった。大闘争の中で、若い同盟員や社学同の活動家が、大量に誕生してきた。しかし中心メンバーが皆んな逮捕されているため、彼らにたいする理論的思想的教育がなされず、「左翼暴力団」化するような傾向すら生み出した。だからこそ、後の分派闘争を、一層消耗な形で繰り広げる結果をまねいたことは指摘するまでもない。もっともこの場合、幹部自体が大衆運動主義者になっていたので、意識的に追求したとしても理論的思想的教育が出来たかどうかは別だが。

長船社研の場合にも本質的には同じようなことがいえる。前から決定的役割をもつN氏がグループのため、どうしても組合的にならざるを得ない弱点をもっていた。それが組合への進出に伴ない、社研の主要メンバーは全部グループへ出てしまった。その結果、一層輪をかけ、すべて組合をどうするか立場から判断する状態をまねいた。まさに組合の裏指導部化してしまったのである。思想的にも形式的にも組合主義を開花させた長船社研は、既にのべた反合闘争や、三重工合併に伴ない組合の組織問題にたいする対応の仕方が、全て組合主義の立場から対処するという状態になってしまった。

我々の党活動の基礎、中心はあくまで細胞活動にあり、組合グループは細胞活動の中の重要な一環を形成しているのである。日常闘争においても、また大闘争であればある程、中心メンバーの細胞や各種グループにおける幹部配置を正しくおこなない、闘いの展望と併

中核派自体の限界性をもあわせて突き出さざるを得ない理由がここにある。長船社研の諸君が意識するとしなにかかわりなく、客観的に「前進」が上部団体の役割を果していたのである。

(六) 自己切開と新しい出発を

長船社研の転換の一助として今迄いろいろな角度から問題点を切開してきたが、一言にして言えば長船社研自身が「共産主義的」活動だと思っていたことが、実は左翼組合主義の域を出ていなかったということである。すべて「長船の戦闘的運動」をどう守るか、三菱にどう拡大してゆかかという視点から問題が立てられ、まさに労働組合運動の戦闘的指導部化していたということである。これだけという異論があるろう。たしかに彼らは党の独自活動を主張していたから。しかしその独自活動の内容はどのようなものであったであろうか。「共産主義的原則を貫く」ということで最大限綱領そのものを組合運動次元にそのまま上から押しつけるという方法であった。このようなやり方を我々は最大限綱領主義とか原則主義とかいっていたが、実際の大衆運動の過程ではこのようなやり方では浮き上ってしまふ。この破綻からこんどは裏返しに右翼路線や無原則的な運動に流れてゆく。このように両者は表裏の関係になって進むものがある。しかもこれらはすべて運動の中に解消してゆくとところに特徴がある。かかる意味で大衆運動主義は運動それ自身を自己目的にしてゆく傾向があるということもあつたのである。

このようになるには、思考方法上に問題があると考える。つまり彼らがよく使う「原則」というものに対する把握の仕方がおかしいのである。真の意味での正しい原則の把握があるならば、

せて明確にして置くことが、なによりも必要である。

(E) 危機を深めた「前進」派との癒着

第五に、このような理論的思想的貧困さをもたらしことを促進させた理由として、革共同「前進」中核派との相互補完的な癒着を挙げないわけにはいかない。

六三年四月革共同第三次分裂は、革命的マルクス主義派と「前進」中核派との分裂をもたらした。長船社研はこの分裂の内容から教訓を引き出そうとはしなかった。さらに「前進」中核派の指導した全運羽田（六三年十一月）や田辺臨時工闘争（六三年十二月）の惨敗から何ら学ぼうとせず、六四年四月「前進」中核派との交流を全面的に再開していったのである。「前進」中核派の坊主ザンゲと引きかえに大量の機関紙「前進」が職場に配布されるようになった。長船社研は自己の力で機関紙「社研」を続けてゆくことが出来ないため、その代りに「前進」を社研の大衆活動家は勿論、その回りには職場活動家に読ませた。たしかに一経営の中でこれ程大量な部数を読者にする力は、他の諸組織にはないであろう。実にそこに今次闘争の悲劇的結果をもたらす一端があつたのである。

「前進」中核派にたいする批判は別にゆずるとして、この機関紙「前進」は、いたずらに「闘え」「闘え」を怒号するだけで、民同の補完物にすらなり下がっているのが現状である。ここからは創造的活動、思想変革の何もかも得ることが出来ない代物である。それゆえこの機関紙を読んでいる社研のメンバーや活動家が、民社社、共と対抗して、革命党建設に進みえないことは火を見るより明らかである。

同時に全国造船社研を共に組織していたことを考えるならば、今次闘争の敗北を単に、長船社研の問題としてだけでなく、「前進」

あのように左右のブレはなくなるであろう。現実におきている具体的事実から、下向的分析的過程をへて、普遍本質論（原則）を明らかにするのはなく、字句上原則として学んだ概念を直接あてはめ切断するのである。同時に、普遍本質論から上向的過程をへて、現在の場所的に展開するというマルクス主義的把握の欠如にもとづいている。例えば、先にあげた反戦闘争の理解にしても、現実には存在する原子兵器による対抗関係の危機的状況や現在の場所的状況を無視して、レーニンの命題を、機械的に一対一的対応で押しつけるなどというのは、その典型であろう。

このような思考方法にまでメスをいれて、検討すると共に、我々の基本的命題である、反帝反スタ戦略についても、スタ官打仆というように一面化されていることについて検討を願いたい。さらに現在問題になっている、反帝反スタの適用論理について、従来の無理解を改め、共に具体化の努力が必要であろう。

長船社研の諸君が従来いきさつにこだわらず、まず己れ自身の切開をおこなない、革命的マルクス主義者として、根底的な転換を計ることを希望する。そしてこの危機に際し、我々と共に、嵐にむかって進まれんことを重ねて訴える次第である。

(附) 革命的マルクス主義者として
発行するにあたって

今迄のべてきた長船社研にたいする批判は、同時に革命的左翼の中にもある欠陥であり、或る意味で、己れ自身にたいする切開でもあった。長い間沈黙を守り続けてきた自分が、今ここで自己の立場を明確にしたのは、日共から分離した後、同じような誤まりを二度三度犯したくないからである。それは我々の進めようとしている新しい革命運動にはかり知れない損害をもたらすからであり、それゆえ断腸の想いで批判を加えたのである。

旧ブンド崩壊以後、この五年間考え続けてきたことは、たった一つのことである。ブンドは何故崩壊したのか。我々の革命戦略とは何か。そのために如何なる党を作るのか。自己の立脚点は何か。この点がはっきりしないがために積極的な組織活動に参加出来ず、ただ完全に運動から離れてしまつては、わからなくなるので、その限りについて、労働運動次元で若干の交流を計つた。

しかし政治的には孤立し、孤独の中で試行錯誤を続けながらも、今日まで進んできたのである。敵と直接対決し、労働運動の第一線で闘ってきた諸君や、自己の革命戦略にむかつて党建設と組織活動の中心にいた諸君も、この間苦悩に満ちた日々を続けてきたであろう。これら第一線で闘ってきた諸君に深く敬意を表するものである。しかし心ならずも集団的組織活動に参加することが出来ず、全く孤立の中で自己変革に努力し、闘い続けなければならぬということ

代は終り、国際的には全く新しい時代が切り開かれたと思つた。それゆえ当時我々は、いわゆる構造改革理論を受け入れ、党内闘争の武器として闘つた。しかしフルチヨフによる米ソ協調や、日本に對する「中立」要求などを通じ、この理論のもつ右翼の本質に疑問をいだき出した。その中からソ連共産党の党内闘争史の研究に進み、スターリンに対してもっとも体系的な本質的な批判をむけていた、トロツキーの理論にまでつき進んだのである。こうして我々は一国社会主義理論や平和共存理論の欺瞞性をマルクス・レーニンの原則對置的な形ではあるがとらえ、さらにマルクスへの回帰からもう一度再出発を計つたのである。一方、砂川闘争―原水禁運動―五七年国鉄闘争その頂点としての新潟闘争―全電通本社支部三役解雇反對闘争―勤評―警職法―安保闘争などの闘いを進める中で、もはや日共の枠内で闘いを進めても、スターリン主義の根底的打破は不可能であるとの決意を固めた。それゆえ従来ブンドとされてきた、プロレタリア世界革命の旗を高くかかげ、新たな前衛党結成をめざして決起することになったのである。

当時激烈な安保闘争の中で、もっとも戦闘的に闘っていた全学連と、それを指導していた共産主義者同盟(ブンド)と合同、続いて大阪中電、長崎造船の諸君も合流した。東京港地区、大阪、長崎にやける拠点地帯の労働の合流によって、ブンドは全国的にも労働者階級の中に大きな影響をおよぼし、組織的力量を築き出した。今日安保闘争の歴史的総括をする場合、当時の全学連と旧ブンドの闘いを抜きにしては全く考えられないと思ふ。しかしそのような表面のはなばなしとは別に、内部的には危機を深めていったのである。それぞれの戦術局面や、労働運動の指導にたいする諸々の意見が、未整理のまま出され、政治局は実質的に機能を喪失していた。もっぱら全学連の指導部と化し、来る日も来る日も国会へむけての戦

は、実際にこのような悲劇を味わつてみなければ判ることの出来ない程、苦しみと不安にかられる日々なのである。そのために以前の関係から、積極的に組織活動の中心として参加を求められれば、未だ不明確のままでも、なしくずしに活動に移つてしまいたい衝動にかりたてられることも幾度かあった。だがそのことは再び同じような誤まりを犯し、幾多の諸君に迷惑をかけることは必至である。そのようなことでは自己の良心が許さないがために今日まで来てしまつた。果して私のような立場におかれた時、革命家としてどちらの道を選ばべきかは、今後の歴史の審判を待つ以外にないと考えている。恐らく今日のような思想的流動状況の中で、未だはつきりした方向を見出すことが出来ず、心ならずも孤立の中で苦闘している多くの同志がいることと信じている。これらの諸君が革命運動と組織化のために、確信をもって共に参加し努力を続けられるようにすることは、けだし我々の責任でもあると思ふ。幸い私がつき進んだ到達地点には既に先駆者が居たし、彼らと今日基本的方向において一致していることが明らかになった。従つて今後それらの諸君と共に共同の努力を開始することを誓うものである。

私自身の過去を振り返り、「革命とは何か」「如何なる革命をやするのか」「党とは何か」「如何なる党を作るのか」という根底的問題について深刻な対決をせまられたのは、いうまでもなく旧ブンドの崩壊時である。戦後間もなく日共に入り、電産の役員、党の常任として活動する中で大全協を迎え、こんどこそ新しい党が生まれるのではないかと希望をもつた。この期待もつかの間、大衆闘争や党内闘争を通じ、ことごとくに裏切られてゆき、日共に対する根本的な不信をいだくようになった。日共の誤まりを深めてゆく中で、当然それは国際コミニズム運動自体の問題にも逆昇つていかざるをえなかつたのである。ソ連共産党二十回大会によつてスターリン時

術に追われていった。それゆえ当然提出された諸意見を理論上の問題として、また対立点はどこから来ているかの本質的な問題として深める努力は何らなされなまま来てしまつた。かくして安保闘争が終り第五回大会をむかえる中で、大混乱のうちに分派闘争が開始されたのである。「東大意見書」を契機に中央では「革通派」「プロ通派」「戦旗派」と三つの分派に別かれ急速にその対立を深めていった。前二者は、ブンドの破産を根底的に止揚するのではなく、従来の小ブル急進主義をもっと徹底化する方向に解決を求めた。安保、三池闘争の敗北、池田内閣の経済合理主義に立脚する迂回戦術、労働運動の退潮等とあわせて、彼らは消滅していった。「戦旗派」は当初労働運動指導における誤まりから、労働者の自覚の過程、さらには党の問題へとつき進んでいった。この中で当然ブンドの革命的解体、そして「革命的戦旗派」へと進み、青山理論(ブンド機関紙「戦旗」五一号)によつて体系化されるのである。その後、東京南部、関西、長崎等のまままった部分や「革戦派」に反対する個々の部分を除き、ブンド中央の大半「プロ通派」も含め、革共同全国委に加入し、かくしてブンドは完全に歴史的使命を終つた。

極く簡単に経過をのべたが、この中で私自身は当初戦旗派の方向にあつたが、「戦旗派」が公然と分派闘争を宣言した時点で意見が違い彼らから離れていった。以後如何なる組織にも所属せず今日まで「我が道」を歩んできた。「革通派」や「プロ通派」は論外として、何れも、「戦旗派」後の「革戦派」にたいしても批判をもちながら、何れも自分自身の明確なものをつかみえず、ブンドの破産と共に、自己の破産をもみせつけられた。若い同盟員と違い十数年にわたる革命家としての歴史があつただけに、その受けた打撃は大きく、自己を根底的に変革してゆくことの困難さがあつた。

以下今日までの経過を追いながら、問題点をのべれば、次のよう
なことがいえる。

一 日共港地区委員長でありながら、既にプロレタリア世界革命
と新しい前衛党を結成せずして、全世界の労働者階級の解放はあ
りえないとの決意を固めていた。このような決意を固めていたとは
いえ、日共との党派闘争への広がり、ブンドとの急速な合同は、
次のような二つの条件を抜きにしては考えられなかった。つまり一
方では日共中央からの弾圧と除名攻撃、他方で安保闘争の激烈な闘
いである。それゆえ、港地区内の同志にたいし、社会主義革命戦略
のもとに、スターリン主義のバクロ、一国社会主義や平和共存戦略
の誤まりは明らかにしたものの極く一部を除き、十分なる理論的準
備、思想変革のなしえぬまま合流する結果となった。また当時黒田
という哲学者がいることは聞いていたが、それはあくまで「哲学者」
であり、我々の運動の直接対象者ではなかった。

革共同を名のってくるものもっぱら関西派で、全くナンセンス
なために問題にしなかった。東大の学生とは同じ日共内で知りあ
っていた関係もあり、最初から対象はあくまでブンドだけであった。

二 六〇年四月共産同第四回臨時大会で港地区は合同し、始めて
大会へ出席した。ここで革命的パトスに燃えた若い同盟員の情熱に
は感激したが、三池闘争の現地から帰って来た中央委員にアジられ
じまいに「武装蜂起の思想」云々まで飛び出したのでこれに反対し
た。そのため完全に浮き上る。その夜の中央委員会で「権力獲得の
問題をどのように無媒介的に出すことの誤り」と「安保闘争にたい
するもっと客観的な分析と方針」を提出しなければならぬことを
主張し、多数の支持を得た。中央委員会でこちらの意見が受け入れ
られたので安堵したものの、卒直にいつてブンドの内状を十分分析
しないで、港地区の諸君を合流させたのは早計であったと思った。

の条件が出来るにとらえた。それゆえ安保を「階級決戦」としてと
らえもっと断固として闘えば政治危機から革命的危機がきたのだと
された。この理論はむしろブンドの闘った路線の直接的理論化にほ
かならず、ブチブル急進主義の正当化であった。また「プロ通派」
は「革通派」のあまりに強い観念性に反駁した部分の学生を結集し
た。しかし何の出発点もたない中間派を特徴とし、本質的にはブ
ンドの延長線上以外なものでもなかった、それゆえブンドの根底
的変革が必要であると思っていた私にとっては、この両者にたいし
ては最初から反対して闘った。

七 これは別に労対の常任部分を中心に、先づ労働運動に対す
るあり方から検討が始まり、労働者階級の自覚の過程などが問題に
なった。そのことは当然党の問題にまで追求が進み、ブンドの思想
の根源にまで逆昇り、根本的変革をなしとげなければならぬとい
う結論になった。この頃までは労対や戦旗結集局の諸君と一致して
活動していた。それが何故「戦旗派」の公然たる分派宣言の開始に
よって離れていったかということである。既にその頃は「革通派」
は自己の方針が浮き上って、実質上活動を中止してしまつた。「プ
ロ通派」は方針がはつきり出せず、あいまいになってきた。一方中
央にいた労対や戦旗の諸君も反「東大意見書」ではまともなっている
ものの、活動に行き詰りを感じ、あせりを覚えてきた。ここから兎
に角、反革通派プロ通のフラクを作り公然と分派闘争を宣言するこ
とによって危機を乗り切ろうとした。しかし「戦旗派」分派を作っ
てみたが、同じような行き詰りは解決しなかった。そのような状況
の中で「階級闘争とプロレタリア党の論理」と題する、いわゆる青
山論文が発表された。それゆえこの論文によって、自己の立脚点が
確立されたとして、「戦旗派」から発展した「革戦派」は勿論、「
プロ通派」までが賛成して自派を解散していったのである。

三 続いて安保闘争の具体的な状況の中で、わずかばかりの労働
者同盟員を全学連の尻につけて、国会デモをやらせる方針に反対し
た。しかしこれは受け入れられず、最後まで続けられた。この頃か
ら労働運動にたいする指導、把握の仕方に対し強い不信をいだくよ
りになった。現に戦場に密着して活動している同盟員ほど、そのよ
うな方針についてゆかれず、組織から離れるものが出て来た。

四 政治局や中央委員会（殆んど開らかなかつたが）は完全に全
学連の裏指導部となり、国会構内突入闘争を自己目的的に追求した。
こういう戦術指導のみに追われるやり方に疑問を持ったり、戦術自
体についても論議されたが明確にならないまま闘いが進められてい
った。

五 このように一面ブンドの指導にたいし強い不信と疑問をいだ
きながらも、この根底的な弱点を見抜き、組織的な闘いにまで発展
させようとはしなかった。その理由は何と云っても安保闘争を勝利
させなければならぬということ、自分自身もまたブンドの「名
声」が高まる中で酔っていた（このまま進めばブンドが大衆を結集
して何とかなると思っていた）のである。従って本質的な対立点を
明らかにすることが出来なかった。

六 かくして何の準備もなしにもたれた第五回大会（七月末）は
大混乱で、何が対立点なのかもわからぬまま幕を閉じてしまつた。
よりやく「東大意見書」が出されて問題の一端が解明される始末で
あった。この「東大意見書」の一派、後の「革通派」は安保闘争の
敗北の原因をもっぱらブンド内部に求め、同盟の誤謬と日和見主義
の一切の根元は、自己金融論にもとづく国家独占資本主義論にあり
彼らの正しい資本主義論の立場に立てば解決するものとみなした。
つまり現代国家独占資本主義論の特徴である、政府の財政金融政策
のうちに根本矛盾を求め、この政策を破綻させることによって革命

私としては、当時、実質的に「戦旗派」がフラクを持っていたこ
とは事実なので、それを公然と唱えることにあるのではなく、内容
を明らかにすることにありと考へた。つまり各派とも行き詰りを感じ
ていたのだ、その解決の方針を提示するところが、ブンドを止揚
出来るのだと思つた。しかし内容の不明確な「戦旗派」の分派宣言
によって、これを認めないやつは反対派として粉砕するのだという
独善に陥ち入り出した。ここにおいて彼らとも分離したのであるが
こちらも問題は労働運動のことであるという程度以上を出ることが
出来なかつた。

現在私が考えてみた場合、従来の大衆運動主義にたいし、労働
運動や党のことが発展過程として問題になることは当然の理である
と思う。そこからこれを革命的に止揚し発展させるには、反帝反ス
タ戦略と、それにもとづく党をいかに建設してゆくか、そのような
問題として提議し論争する、そしてその方向で組織的結集をはかる
ことが必要であった。事態はそのような方向に進まず、「革戦派」
になって遂にブンドの裏返しになってしまふ弱点をさらけ出した。

八 こうした中で、私と一緒に港地区からブンドに合流した同志
の中には、両極分化が既に始まっていた。一方はブンドで一緒に闘
っているうちに、自から小ブル急進主義者として自己回転している
ことに気がつかず、「東大意見書」を実質的に支持する側に立った。
他方は一連のブンドの急進主義に愛想をつかし離れつつあった。後
者の同志とは、ブンド批判という限りについて、私と大体一致した
が、既に共に闘って新しい方向を求めようという意欲をなくして
いた。ここにおいて私は、私自身が問題を掘り下げするための組織的
条件を失なうに到つた。

私の場合、ブンドの崩壊によって同盟員全体にたいする責任があ
ると共に、特殊的には日共から決起し、共に闘ってきた港地区の同

志に特別の責任があると考えている。今日の混乱を生み出し、諸同志を大混乱の苦痛にたたきおとしてしまったという点で、一層深く責任を感じないではおれなかった。港地区の諸君がこのような状態になった原因は、第一に日共との党派闘争の中で十分思想変革をなし得なかったこと。第二に既にあったブンド中央段階の意見の相違を絶えず明らかにし、事前に討議し、理論闘争をおこなっていなかつたこと。第三に何よりも私自身が革命運動についての本質的な諸問題に不明確であつたために、多くの諸君を、左右のジグザグにおとし入れる条件をつくつてしまつたのである。かかる意味で深く自己批判する次第である。

九 ここにいたりもう一度新しい角度から検討しなほし、自己の再建を準備しようとした。先づマルクスへの回帰を再度始めながら、一方その頃初めて逢つた黒田から「探究」や「革命的マルクス主義とは何か」を始め、彼の書いた諸文献を全て送つてもらい研究を始めた。その中で反スタ左翼の歴史や、その時点その時点での論争点も明確になり、ブンドにたいしても、早くから本質的批判を行なつてゐることが明らかになつた。もっと早く彼の批判については検討すべきであつたと思つた。

十 こういう中で、どうしても諒解出来ない問題が起きてきた。革共同全国委は、「戦旗派」から「革戦派」にゆく方向を支持してゐると考へたことである。たしかに「戦旗派」はブンドの根底的立場という点で、他の二分派とは本質的に遠う方向に進んでゐる。しかし同時にそれは裏返しになり極めてセクト主義的であり、しかも無理論による行き詰りを、道徳主義的に乗り切ろうとしていた。そして青山路線は青山個人がうちだしたことは事実であるが、あきらかに「戦旗派」や「革戦派」の中心部分と革共同全国委の中心グループ（現在これらの諸君は「前進」中核派へ全部行つてしまつた）

反スタ革命戦略とどのように関連させるか、その中における左右のブレに対する批判など、明らかに革共同の運動を前進させる論争もあつた。しかしそれらの問題の中には単に戦術上の違いというものではなく、思想上の分岐があり、この解決いかんによっては再分裂が必至であつた。

十三 ここでもかなり思想的に重要な位置づけがなされ、検討しなければならぬものとして、青山論文を批判した山本勝彦論文がある。（「革戦派破産の根拠は何か」純粋マルクス主義からの脱却を前進三一号）この論文は、青山論文のもつ立脚点主義を批判し、従来の大衆運動主義にたいして、古典マルクス主義を対置したものに過ぎないとした。そして「プロレタリア党の論理」の押しつけであり、前衛党建設が「真空の中の前衛党論」に随してゐると述べた。それゆゑ革共同全国委の立場とは無縁であることを指摘した。

当時私自身革共同とは対立関係にあつたので、この論文を彼らの中における「対立と混乱」の現われであるとしか評価しなかつた。事実青山論文が革共同全国委の立場であると理解して、ブンドから革共同に移行したものは、この論文が出たことによつて、自己の「立脚点」が崩されかなり混乱した。

この批判からさらに自己変革を遂げていった者と、自己の立場が不明確になり、ブンドの裏返しや、再びブンド的発想法に戻つていった者が出てきた。同時に「革戦派」指導部とフラクをもつて、あのような方向に進めざるを得なかつた。革共同全国委の指導部ももっと事前に問題を掘り下げてみる必要があつたと思ふ。私自身この論文を現在再評価してみた場合、その内容は私自身が青山論文にいていた疑問の解明をも示してゐたし、本質的弱点を指摘した唯一の論文であつた。従つて当時この論文を卒直に受け留め検討を続けるならば、もっと早く自己の立場を確立したかも知れないし

とフラクをもつて進めた方向である。最近になつて当時の事情について革マル派機関誌「共産主義者一二・一三号」では公然たる分派闘争への介入が弱く、わずかにのせた黒田の論文も武井が削除したとある。兎に角当時の状況は我々部外者にはよくわからないが、表面的には青山理論の延長線上に、革共同があるというように一般的に理解された。事実そう理解したからこそ、あの理論で分派闘争に終止符が打たれたのである。いずれにしても私にはブンドの二の舞をやりたくないという考へもあつて、より一層革共同全国委の内部状況を知らなければ、うかつに近寄れないという考へになつた。

十一 さらに不可解なことは、「戦旗派」の諸君はまだしも、昨日まで黒田の批判をしてゐた「プロ通派」までが、青山理論によつて破産したからという理由で、革共同全国委に加入した。しかも学対部長や全学連委員長を始めかなりの中心部分に座つた。革命的マルクス主義者の自己変革がかくも簡単にゆくものであるのか。また黒田の「むずかしい」理論がそんなに早く理解出来るものであるのか。反帝反スタ世界革命戦略の本質的把握がなされたものであるのか。極めて疑問に思つた。それ以上にそのようなものを受け入れ、指導部につかせる、革共同全国委の組織指導方針はもっと不可解であつた。

十二 予想通りその後出されてきた方針は、従来ブンドがやってきた裏返しであり、内部的にはかなりの混乱があらわれてきた。「政暴法闘争でマル学同は限界につき当たら共学同を」「学生の先駆性理論」の裏返しからくる「プロレタリアによる学生の獲得」を「大衆団体と学生活動家組織とを混乱させる」「反帝反スタ全学連」全学連二八中委における「兵士の獲得」問題「原水禁運動を肉体的デモによつて破産せよ」とすること、等々。勿論米ソ核実験をめぐつて革命的反戦闘争をどのように進めるか、反戦闘争と反帝

少なくとも、後で述べるような誤まつた活動はさけられたであろう。

十四 この間あまり活動しなかつたが、あえていえば佐久間元の「日本における反スターリン主義運動と共産主義者同盟」その組織論的総括」のうけとり方と雑誌「先駆」へのかかわりがある。佐久間論文が発表されこれを読んだ時は、革共同に反発する立場から一定の共感を感した。しかしこう考へても従来のブンドの否定に立ちながら、結局は革共同全国委の「正当性と正統性」を否定するあまり、ブンドにも「正当性」があるのだという強調に陥り、問題がはつきりせず、したがつてまた何ら有効な組織方針にはなりえなかつた。また「先駆」は全体としては当初反スタの総合雑誌的方向を求めたが、内部で「官僚制国家資本主義」論をめぐり、意見が対立した。私はそのような方向を強く進めるのならばついてゆかれないという立場で一号で編集部より去つた。同時にもう一つの特徴として、芳村論文に代表される「労働者の自己権力」論があつた。これも内部に意見の対立があつたが、私自身は当時組織論について極めて不明確であつたのでこの論文についても、はつきりしていなかつた。つまり各派が交流の中で集つて党が出来るというのもおかしだが、

といつて三人よれば党を作り、綱領を作るといふ、いわゆる綱領主義的発想法もおかしく、この両極端的な考への間ではつきりした方向をみい出しえなかつた。いずれにしても芳村論文が、当時の社学同の一分派の理論的支柱になり、この雑誌が利用されたことは、自己批判しなければならぬと思ふ。『先駆』からも離れた後、文字通りどこも組織的かわりのないなかで、方向性をつかめなかつた。しかしかならず何らかの新らしい部分が出てくるという考へもあつた。

十五 こういう状態の中でのうちに、革共同全国委の分裂が始まつた。（六二年秋から六三年初めにかけ）。直接には大管法闘争

の統一行動、動労闘争、参院選挙総括、産別委と地区委のことなどに端を発した。中心問題としては、キューバ危機にみられるような反帝反スタ戦略の具体的適用の問題と、大衆運動主義と党組織論にかかわる問題であった。この分裂にたいし旧ブンド系として活動していた多くの諸派は、「前進」中核派の動向に関心をもちた。しかし自身は、当時分裂問題をめぐる諸文書を「前進」紙上の対立点などとあわせて研究する中で、むしろ革命的マルクス主義派（革マル派）の方に関心をもちた。機関紙「解放」第一号には多くの賛成点があり、中でも「中央機関紙の再出発に当って」はそのまま両組織の活動内容を明らかにしたものととして、注目すべきものがあった。「前進」は読者とともにいうことで、日共機関紙「赤旗」が進んでいるような大衆に迎合しながら部数拡大を計る方針だった。これにたいし「解放」は読者との思想闘争を通じながら、彼らをも革命的マルクス主義者として自己形成させ、組織化を計るものとして打ち出してきた。それゆえ「解放」の諸論文はそのまま彼らの方針の理論化であり、以後山本、山代、森、石田などの論文を中心に彼らの主張を注意深く検討した。

十六 六四年一月関西において全国共産主義労働者協議会（略称全共労協）の発足をみるにいたり、東京ブンドの再建がかこなわれた。この関西会議への出席と、ブンド再建へ参加することが要請された。しかし「中国核実験支持」などを打ち出している派もあり、このような人達と一緒に活動出来るわけはなかった。同時にブンド再建の現実的条件を考えた時にも、はっきりした立場も方針もないので断わった。他方、革マル派が今後どうなつてゆくかということも、はっきり見極わめておきたかった。

十七 第一回、第二回全国労組活動家討論集会は、既に明らかにされているように、労働運動次元での反民同反日共の枠内におけるり詳細なレジメの中でほぼ自己の革命的立場を明らかにした。（内部的事情で残念ながら極く一部の諸君の手にしかかわらず、それ以上文書化しなかった）

十九 それ以後も革命的左翼の諸君と色々な機会を通じ、個人的或は組織的に討論を深めていったし、長船問題にたいする各派との討論も含まれていた。この中で今日到達した立場が一層正しいことが確認された。

反スターリン主義左翼の歴史を振り返って見た場合、現在如何なる時点にあるのであろうか。

第一期における基本的対立は、純トロ対革命的マルクス主義者の闘いであった。この時期においては日本における革命的左翼の立場をいかなる方向にするかの闘いであった。つまりトロツキードグマチズムの枠内におしこめ、第四インターの一支部に解消してしまいか、或はトロツキー理論をスターリン批判のパネとしながら、「反帝反スターリン主義」の独自の世界革命戦略を打ち立てるかの闘いであった。今日誰の目にも明らかのように純トロ系は完全に没落、組織的に皆無の状態にある。

第二期における基本的対立は、小ブル急進主義者対革命的マルクス主義者の闘いであった。新しい革命運動の初期にはインテリゲンチアや学生層から先づ組織化が計られてゆく。別名学連新党と呼ばれるような実体があった旧ブンドにおいて体现された運動であるが、旧ブンドの崩壊と共に、基本的には解決された。勿論基盤がある程度学生層の中にある現在、これからも色々な形態をとって現われるが、革命的左翼の中で運動の主役となることはありえない。勿論ブンド的発想法は第三期になっても色々な活動の中にも引き継がれている。

第三期における基本的対立は、自称反スタの社民的反スタ主義者

協力である。これまでにみられなかったような多くの諸潮流の交流を計り、一定の協力関係を生み出した。この中で私は労働者同盟準備会を通じ積極的に参加した。党派的に決めかねている現状の中で、一定の限界付きではあるが、労働運動への介入という点で有意義であった。労組活動家討論集会は一応成功したが、組合運動自体をいかに戦闘的に展開してゆくかという理論内容の追求について十分であった、と同時に混乱をさけるためということで革命党建設との関連を意識的に切り離していたため、そこにはどうしても限界があった。

労働者同盟自体でも党の問題をさせて、労働運動の戦闘化を考えることが出来ないとの意識になってきた。この中で私は過去の総括と、労働者同盟の新しい転換方向の考え方について、積極的に討論を組織していった。

十八 色々な各派との交流の中で、自分自身も明確な態度を取らなければならなくなってきた。この点で、色々諸潮流との交流を計っても、党の問題は一步も前進しないという現実があった。それを一層理論的に明確にしていたのは、革共同革マル派M氏との討論であった。革共同全国委の分裂から革マル派の痛苦に満ちた新らしい変革の道は、革命的左翼に幾多の教訓を指し示した。この中で我々の進むべき方向として、対象化出来るものは革マル派以外にないという確信を得た。ブンド崩壊以後、試行錯誤と政治的孤立の中で苦しみながらも、ほぼ考えぬいてきたことと基本的方向において大体一致することが確認された。これらの上に立って六五年八月「労働者同盟の転換にあたって」我々の進むべき道は何か（一）労働者同盟の総括、（二）既成革命路線の欺瞞性、（三）世界革命戦略はどうあるべきか、（四）その上に立っての組織戦術、（五）日本における新左翼特に反スタ左翼の歴史と現状、（六）労働者同盟の基本的方針」といかな

対革命的マルクス主義者の闘いとして現にあらそわれている。前者は「前進」中核派として体现し、後者は革マル派として組織化されているのが実状である。

このような状況になったのは、第二期におけるブンド主義が、本当に克服されなかったことである。それと共にある程度労働者の中に組織的基盤が出来て来たことを現わし、前進派は労働者の中にある保守的要素に、依拠していることをも物語っている。

この「前進」中核派は一応「反帝反スタ」をスローガンにしているが、現在では反スタが形骸化され、反帝反スタ官戦略に変わりつつある。ただわずかに自己の党派性の旗じるしにするためにかかげているに過ぎない。そのため反スタの具体的適用の論理などは完全に海中に投げ捨ててしまったと考えられる。それゆえ具体的組織戦術になると、社共に対応した「第三潮流論」になり先づ運動を、次に思想を、という二段階戦術となって現われる。労働運動へのかかわりは、完全に組合主義であり、大衆運動主義である。最近における「二二自治労働争の方針」などはその典型であり、「先づ運動をやらせることだ」ということから、民同の補完物にさえなる時がある。黒田理論から出発しながら、分裂にあたり、これを否定する立場に交ってしまった。そこから自己の革命的立脚点がいまいになり右往左往する状態になってしまったのだ。黒田の理論的出発点と反スタ運動の歴史をふまえて今後もより一層発展させることは必要であるが、これを否定した上で、反スタ左翼の運動は成立しない。このことは過去の幾多の歴史的事実が物語っている。彼らが今こそ分裂時の諸問題を再検討し、自己批判しなければ、個々の戦術において左翼的ポーズを取ったとしても、本質的には今もますます右翼化し、反スタ左翼とは無縁な地点にまで墮落してゆくであらう。革命的マルクス主義者はこのような欺瞞性をアバキ、第三段階をも革命的に

止揚し、闘いの歩を進めるであろう。

私は今ここに不十分ではあるが、内外に自己の立場を明確に宣言した。今后私と同じような考えを持つ諸君と共に、革共同革マル派と協力関係を保ちながら、共産主義者の理論的思想的人間的同一性を獲得するため努力をしてゆきたい。そして反帝反スタ世界革命戦略とその基本的組織戦術の一層の深化を計ってゆきたいと考えている。

革命的マルクス主義の旗のもとに！！

連絡先

東京都北区桐ヶ丘一丁目w九一四

矢野 宛

定価 70円
(送料共100円)

